



知的障がい教育における模擬株式会社を 活用したキャリア教育の実践

北海道今金高等養護学校

模擬株式会社 IMAKANE FACTORYのロゴマークは、創立20周年のシンボルマークとして制作されました。原画は平成25年度の第17回学校祭のポスターに描かれていた「たまねすみちゃん」です。担当したのは、学校祭実行委員で産業科2年生だった16期生の生徒でした。

「たまねすみちゃん」は、各学科の生産品でできており、耳は、産業科の皿、右手は産業科のマグカップ、顔と体は農業科のたまねぎ、足は大根、しっぽの先は生活家庭科のエコ石けん、マントは生活家庭科のステンシル布巾です。

はじめに

本校は北海道南部の今金町に平成9年に開校し、今年で21年目を迎えます。町は農業を基幹産業とする人口5,600名ほどの農村地帯です。生徒は主に函館市やその周辺の道南圏全域から入学しています。学科については、現在、窯業科・産業科・農業科・家庭総合科・生活家庭科の5学科を開設しています。学校が所在する今金町では、本校開校以来、全世帯（2,600世帯ほど）が後援会に加入するほか、学校行事や部活動の大会参加の際には町所有バスの運行、グループホームの建設への補助金の交付、就労支援事業など、様々な学校支援活動を行ってきました。

平成22年11月に今金町議会は、町独自の「特別支援学校卒業生に対する今金町就労支援事業実施要綱」を定めました。この事業は本校卒業生を役場で、「今金町臨時事務嘱託員」として2年間雇用し、様々な業務を通じて職業能力を高め、一般就労に結びつける事業です。当時、このように市町村が要綱を定めて、継続して地元の高等養護学校生の就労支援に取り組むのは全道初の取り組みでした。

この2年間の就労支援事業の対象者となった卒業生は、1年目から見違えるような変容と成長を遂げていくことから、この事業をどのように学校教育に取り入れられるか考えるようになり、この事業の下限延長ができれば、これまでの職業学科を設置する高等部の教育方法では実現できなかった、より実践力のある生徒を育成できるのではないかと考えるに至りました。そのための条件整備としては、地域の行政や企業、関係機関との連携体制の確立が必要であり、平成28年10月4日（火）に外崎秀人今金町長と本校高嶋利次郎校長は、「特別支援学校卒業生の就労支援並びに自立支援に関する連携協定」を締結しました。このことにより、在校生の作業学習及び現場実習への協力、校内外での作業学習等における教員及び生徒への技術指導及び助言、就労支援及び通年雇用、居住環境の整備、雇用と生活の自立に向けた支援などについて、連携協力する体制が整備されました。

また、本校の入学生の実態が変化し、入学生の1/3が中学校の通常学級出身であり、発達障がいのある生徒も増加しており、社会で生涯にわたって働き、社会人として生活していく力を育成するためには、これまでにない取り組みの必要性を感じていました。教師から指示にされて行う「作業学習」そのものにも、時代の変化や生徒の実態の多様化に合致していない部分が目立ち始め、作業学習の進め方についても、アクティブ・ラーニングの一つである「協同学習」の方法を取り入れ、主体的・対話的で深い学びが可能となる新しい作業学習を開発し、より職業人としてのワークキャリアアップが図られる教育を推進する必要性がありました。

そして、平成26年度から今金町商工会が中心となって、本校卒業生の雇用創出と住む場所作りを目指す『にぎわい！今金』コミュニティビジネス創出による地域力再生プロジェクト事業が始まりました。この事業は、「障がい者がビジネスで活躍する町 ソーシャルタウン今金町」を目指しており、卒業生が地場産業の担い手となる取り組みが、全町的な取り組みとして進められました。

このようなことから、本校では、PTAと連携して平成29年度から模擬株式会社を活用した教育方法を試行し、生徒が地方創生と共生社会の担い手となるためのワークキャリアアップを図ることとしました。本冊子は、今年度取り組んだ「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY を活用したキャリア教育の実践」の成果をまとめたものです。校内研究の推進に当たっては、本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸教授に、本校まで足を運んでいただき、重要かつ示唆に富む御助言をいただき、研究を推進することができました。深く感謝申し上げます。是非、忌憚のない御意見と御助言をいただければ幸いです。また、今後とも本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

北海道今金高等養護学校長 高 嶋 利次郎

目 次

はじめに

第1章 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の設立前史……………1

- 1 特別支援学校卒業生に対する今金町就労支援事業
- 2 『にぎわい！今金』コミュニティビジネス創出による地域力再生プロジェクト事業
- 3 障がい者雇用事業者連絡会
- 4 特別支援学校卒業生の就労支援並びに自立支援に関する連携協定

第2章 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の全体計画……………6

- 1 設立の趣旨
- 2 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の目的
- 3 目標
- 4 学習内容
- 5 学習の仕組み
- 6 組織・業務内容
- 7 組織・業務内容
- 8 学習日程
- 9 帳票類と会計処理
- 10 諸帳簿の流れ
- 11 帳簿組織等
- 12 自己評価
- 13 年間指導計画

第3章 今養版商品管理システム……………16

- 1 目的
- 2 バーコード
- 3 エクセルのセットアップ
- 4 入庫・出庫の流れ
- 5 その他

第4章 実践研究の結果……………20

- 1 第1回学科全体交流会（模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会）
- 2 学校祭の販売活動に向けて
- 3 生徒の振り返り
- 4 「会社の仕事」としての授業展開（受注品製作）

第5章 成果と課題……………37

- 1 模擬株式会社の取り組みの成果
- 2 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY における指導の在り方に関する考察
- 3 模擬株式会社の取り組みの課題

〔資料編〕……………45

実践事例1・2・3・4

- 資料1 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 定款
資料2 組織図・業務内容・諸会議
資料3 IMAKANE FACTORY商品管理システムガイド
資料4 模擬株式会社の帳簿

おわりに

第1章 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の設立前史

1 特別支援学校卒業生に対する今金町就労支援事業

今金町は、以前から本校の卒業生の就労支援に取り組むことができないか検討していた。本校でも全学年が現場実習を行い、役場やその関連機関での実習を行うこともあった。平成21年度当時の本校生徒の一般就労では、経済不況の影響から採用する会社が少なく、水産加工会社で働くことが多かった。播磨正一第5代校長は、他県では行政側が知的障がい者を正職員とし雇用する取り組みが開始されていることを踏まえて、「今金版デュアルシステム」を目指して、町役場（将来的には町内企業、事業所等）と共に協議を開始し、就労に向けた人材を育てる新たなシステムづくりの構築を模索し始めた。平成21年度に今金町も、このような地域状況を踏まえ、本校の卒業生を支援する取組の一つとして、町の職員として一定期間採用し、職業自立への支援を行う方針を示し、具体的な進め方についての協議を始めた。町役場の担当窓口を教育委員会にすることで、本校との連携もスムーズに行うことができるようにした。

当時、2年生になる生徒の進路方針を決めることが困難な状況があり、外崎秀人町長、中島光弘教育長はじめ町役場の方々が、教育委員会での現場実習の受け入れを決定した。平成21年、22年に今金町教育委員会で現場実習を実施した生徒は、教育委員会の職員の方々の御配慮と御指導の下、町役場の方々の期待に応える成果を上げた。この実習を通して、関係者間では、生徒の職業能力を高めながら、今金町としても将来の就労につなげることが可能ではないかと考えが深まった。

このような経緯を経て今金町議会は、平成22年11月に町独自の「特別支援学校卒業生に対する今金町就労支援事業実施要綱」を定めた。この事業は本校卒業生を役場で、「今金町臨時事務嘱託員」として2年間雇用し、様々な業務を通じて職業能力を高め、一般就労に結びつける事業である。

具体的には、本校在学時の2・3年生次にそれぞれ9日間・7週間の現場実習や前提実習を行い役場と本校が実習の評価を協議する。そして、その生徒がこの事業の対象となれば役場での臨時事務嘱託員の2年間に職業人・社会人としてのスキルアップを図りながら次の就労先での職場体験を行うなどして将来の一般就労につなげていくものである。

⇒ 年次	在学期間			役場での臨時職員としての期間（原則2年間）		一般就労へ
	1年生	2年生	3年生	1年目	2年目	
内容	町内・近郊での現場実習（引率実習）	役場での現場実習9日間（単独実習） ケースにより再度実施もある	役場での現場実習7週間（前提実習）	職業人・社会人としてのスキルアップ	職業人・社会人としてのスキルアップ 次の就労先での職場体験	職業自立へ
役校場のと連携	対象生徒の把握	実習内容の協議 実習の評価と協議	実習内容の協議 実習の評価と協議	定期的評価と協議	定期的評価と協議 今後の就労（移行・継続）について協議 職場開拓と体験受入 新職場との協議	新職場との連携

現在、この事業での採用者は6名となっており、2年間の事務嘱託員や介護補助員の臨時町職員として勤務する傍ら、一般就労希望先での実習を通し本人の職業人・社会人としてのスキルアップを図りながら、本校と町が連携を深め一般就労に結び付くように支援を続けている。

2 『にぎわい！今金』コミュニティビジネス創出による地域力再生プロジェクト事業

(1) 事業の開始

今金町は農業の町であるため、高嶋利次郎第7代校長は平成26年度に「教育と福祉と農業の協働」を重視し、社会福祉法人を利用する卒業生が農家で施設外就労する「ユニバーサル農業」の枠組みを「キャリア教育・就労支援・定住促進事業（案）～「今金モデル」～」として整理し、町役場と協議してきた。

一方、同時期に今金町商工会では、町、農協、社会福祉法人光の里、本校と連携して、農業と商業等をワークシェアリングして通年雇用と住む場所づくりを行う計画を策定しており、学校としても、商工会事業（ユニバーサル農業を含む）について連携・協力した取り組みを進めることとした。今金町商工会では平成25年度から今金町において人口減少等多くの地域課題がある中、「農業」「福祉」「教育」「観光（自然）」等の地域資源を活用して、地域コミュニティ再生や雇用拡大を図り、交流・定住人口の維持・増加に結び付くコミュニティビジネスを創出することを検討しており、平成26年度から中小企業との補助金を得て調査研究事業を開始した。構成団体は、商工会、今金町、JA今金、社会福祉法人光の里、本校である。

(2) 平成26年度事業

平成26年度は、障がい者雇用に関する可能性と空き家、空き店舗利活用に関する調査研究が実施された。具体的には、アンケート調査が在校生やその保護者、本校職員、商工会会員、農業経営者、地域住民に実施された。その結果、生徒アンケートの集計では、25.4%が、「希望する仕事があれば今金町で働きたい」と回答している。また、保護者のアンケートの集計でも53.2%が「希望する仕事があれば今金町で働かせてもよい」と回答していた。

商工会会員の意識調査では、「業務上のスキル、対人能力等」が雇用に当たって懸念されることが指摘されていたが、「条件が整えば可能性がある」と回答した会員は24.4%であった。農業経営者の雇用受け入れ調査では、「積極的に受け入れたい」（3.1%）と「条件によっては受け入れたい」（46.5%）の49.6%が条件や環境が整えば雇用に前向きなことが分かった。商工会事業では、単なる福祉の町ではなく社会に貢献する障がい者を輩出し、「障がい者が活躍するビジネスを育てる町」として差別化を図り、「障がい者が活躍するビジネスを育てる町」＝「ソーシャルタウン今金町」を目指すことが確認された。

(3) 平成27年度事業

平成27年度は、それぞれの課題解決に向け以下の事項に取り組んだ。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 商工業・農業による就労実習実証試験の実施② 生活実証試験の実施 |
|--|

- ③ 商工業・農業による雇用シェアリング実証試験の実施
- ④ ソーシャルタウン今金町の理解推進と協力体制構築
- ⑤ 障がい者雇用予定の企業との連携・協働。

本校生徒の職場実習実験（H27.8.24〔月〕～12.2〔水〕）では、28名の生徒（延べ92名）が参加して、職場実習が延べ77日間にわたって12事業所（農業・商業・サービス業）で行われた。また、雇用シェアリング実証実験（H28.1.19〔月〕～2.18〔木〕）では、13名（延べ36名）の生徒（光の里居住者1名を含む。）が参加して、職場実習が延べ30日間にわたって9事業所（商業・飲食業・サービス業）で行われた。

その結果、63%の企業が「想定以上の適応力がある。」と評価した。87%の企業が「将来障がい者の雇用を視野に入れる。」と答えた。また、今回の実習先に「就職してもよい。」と考える生徒が35%みられた。取組の成果としては、次の事項が挙げられた。

- 職場での実習は企業経営者やマネジメントと養護学校生との双方にとって双方に安心感をもたらすことに結び付く。
- 障がい者が対応できる業務範囲を拡大することによって雇用意欲が高まる。
- 職場実習の規模を更に拡大し期間を長期化することで、雇用シェアリングのニーズマッチングを多面的に図ってゆく必要がある。

そして、商工会では、本校生徒と町内の社会福祉法人「光の里」に勤務する障がい者の就労実習実験から得られた問題点や課題を整理し、就労する障がい者向けの就業マニュアルと、障がい者を雇用する職場のマネジメント向けの雇用マニュアルとして、障がい者雇用マニュアルを作成した。特に、雇用側・労働側の安心バイブルとして作成した「雇用マネジメントマニュアル」は、本校進路指導部の教師が作成に協力して、生徒が作業に取り組みやすいように様々な手立てが示されており、「ユニバーサル農業」を具体化した内容になっている。

(4) その後の取り組み

平成28年度は、①シェアハウス実証実験、②雇用シェアリングのためのオペレーションシステムづくり、③まちづくり会社設立に向けた検証の三点に取り組んだ。一方、平成27年度に今金町山村活性化地域協議会が発足した。この協議会は、今金町の山村地域の活性化と振興を図るため、啓発、普及、情報発信など、各関係機関、団体などが一体となって農山村と都市の交流による今金町の農業の活性化や多様な担い手が支えていく地域産業システムの構築に資することを目的としている。この協議会でも、障がい者雇用の検討が進められている。

平成29年3月7日（火）には、本校卒業生を雇用して、地域産業を行う組織として、一般社団法人i・スマイルの設立総会（平成28年度社員総会）が御こなされた。「i・スマイル」の「i」は、「いまかね」の「愛」、そして「いしずえ」の「愛」である。i・スマイルは、多様な人材が活躍できるコミュニティビジネスを創出し、企業誘致を含めた新たな雇用形態や場の確保、今金高

等養護学校卒業生を中心とした障がい者雇用に向けた環境整備を図り、人口減少に歯止めを掛けることで、農業も商工業も潤うことで地域経済の活性化を目指している。

3 障がい者雇用事業者連絡会

本校の卒業生が、町内の企業に就労し働いていく中で、雇用主は業務の内容や進め方をどのようにどのレベルまで助言したり指導したりすればよいのか、障がいとの兼ね合いで迷う場面がある。3学年の前提実習の際には、進路担当者から雇用主には本人の障害の状態や特性、接し方や伝え方などについて伝えてはいるが、就労してからは本人にとっては実習ではなく毎日の仕事となり、意識も変わっていく。その結果、雇用していく中で新たな課題や悩みが生じるようになる。雇用主にとっては、卒業生をどのように理解し、接したらよいかについての詳しい情報が必要になった。

このことに関わっては、本校の学校評議員会で就労後の卒業生の課題と具体的な対応が話題に挙がった。具体的には、初めて障がい者雇用を行った雇用主にとっては、「どこまでが障がいのできないのかが分からない。」、「のびしろがどこまで分かれば、スキルアップさせられるが、知識不足である。」、「相談や支援要請をする場や環境が必要である。」などである。

このような場合には、学校では必要に応じて、卒業の支援の主体となる相談支援事業所「相談室ひかり」の協力の下に、企業・グループホーム・進路指導部で支援会議を開き、情報共有と本人への支援に役立てるようにしている。

今金町では、「特別支援学校卒業生に対する今金町就労支援事業」と今金町商工会が中心となって関係機関と連携して進めた「『にぎわい！今金』コミュニティビジネス創出による地域力再生プロジェクト事業」によって、町内で就労する卒業生が多くなる見込みがある。そのため、初めて障がい者雇用を行う企業が増加することが見込まれるため、従来以上に就労支援の体制を強固にする必要が生じてきた。

そこで、学校評議員会では、自立支援協議会の就労支援部会が中心となって、就労後の支援体制や情報交換をすることが協議され、その後、本校の学校評議員でもあり、実際に障がい者雇用を自社で行っている小川ひとみ氏が中心となって、平成27年度から今金町保健福祉課等と協議し、平成28年度に「障がい者雇用事業者連絡会」を自立支援協議会と関連付けて立ち上げることになった。

構成員は障がい者雇用事業者、相談支援事業者等の担当者であり、連絡会で協議等を行う内容は次のとおりである。

- 雇用中の対応について
- 雇用事業者及び相談支援事業所、光の里の地域支援係等のネットワーク構築
- 雇用事業者間の情報共有、意見交換
- 自立支援協議会（就労支援部会）への提案、提言等

構成員については、参加者の意向を考慮し、今後参集範囲を拡大する可能性も視野に入れている。また、参加者の意向を考慮し、自立支援協議会の参加や他の協議会等への統合の可能性も考えられ

ているが、当面は、連絡会の開催回数を重ねながら、連絡会の扱う内容や形態を参加者で決定することとしている。

4 特別支援学校卒業生の就労支援並びに自立支援に関する連携協定

卒業生の就労先については、平成23年度から開始された役場の就労支援事業以外は、卒業生のほとんどが食品加工や水産加工系の業種に就労していた。卒業生の就労状況（1期～17期）は、一般就労と福祉的就労を合わせると、在籍した学科に関係なく「食品加工・水産加工」が71.1%、「流通・サービス」が16.7%、「農林水産業」が7.8%、「環境整備」が3.3%を占めていた。しかし、生徒の実態の変化に伴い、徐々に就労先に変化が見られ始め、26年度卒業生の内、2名が流通・サービス系の大手企業に就労するなど、これまでにない就労先の広がりが見られるようになってきた。卒業生の進路動向を踏まえて、これまでの「ものづくり学科」の作業内容を見直し、より直接的に卒後の就労に役立つ学習経験を増やすために、平成29年度から共通教科の作業学習（職業・家庭）として、「学科共通作業」（環境整備、流通・サービス、食品加工）を設けることとした。

また、今金町商工会事業が開始され、農業・商業等のワークシェアリングによる通年雇用を目指すことになり、一人当たりの現場実習先も農業や商店など幅広くなってきた。28年度には商工会事業により、2名が町内で一般就労した。実習先が多様化すると共に、商工会事業は今後も継続して行われ、植物工場が町内で建設され雇用が開始することに伴い、町内就労者が増加することから、関係機関の連携や調整がより効果的に行え、継続した連携と支援がスムーズに行われる関係機関相互の「関係性」に社会的な枠組みを付与しようとする気運が、平成27年度から関係機関の間で高まり、本校の学校評議員会でも課題として指摘されてきた。

このような経緯を経て、今金町では本校の生徒の実習、卒業生の就労支援と自立支援に関わって、本校と連携協定を結ぶ方針を決定し、平成28年10月4日（火）に調印式が今金町役場で行われた。調印式には外崎秀人町長と高嶋利次郎校長が出席しました。協定締結に先立ち、中島光弘副町長から経過並びに主旨について報告がなされた後、町当局幹部職員と本校教頭が見守る中、外崎町長と高嶋校長が署名し協定書が交わされた。

連携協定の目的は、今金町の特別支援学校高等部生徒の就労に関する専門的な知識及び技能の向上を図るとともに、就労支援並びに自立支援に向けて包括的な支援体制を整えることである。協定の目的達成のため、協定書では次の事項について連携協力することとしている。

- (1) 在校生の作業学習及び現場実習に関すること
- (2) 校内作業学習等における教員及び生徒への技術指導及び助言に関すること
- (3) 就労支援及び通年雇用に関すること
- (4) 居住環境の整備に関すること
- (5) 雇用と生活の自立に向けた支援に関すること
- (6) その他相互に連携協力することが必要と認められる事項

第2章 模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の全体計画

1 設立の趣旨

(1) これからの社会の動向

中教審答申（2016）では、「子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就く（キャシー・デビッドソン氏〔ニューヨーク市立大学大学院センター教授〕）との予測や今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い（マイケル・オズボーン氏〔オックスフォード大学准教授〕）などの予測がある。」と将来の社会の変化を紹介している。

卒業生は一般企業に就労するほか、福祉サービスを利用する福祉的就労をしているが、将来的には指示されて作業する就労状況から、業務遂行上の課題を発見して改善することができる能力が今まで以上に求められるようになると思う。

(2) 生徒の実態と教育上の課題

在校生の実態を見ると、集中力の持続や自己統制に課題があったり、社会性の発達の遅れもみられる。学力や発達の状況は個人差が大きい。窯業科・産業科、農業科、家庭総合科、生活家庭科のどの学科の作業においても、「丁寧に手早く作業すること」を重視して成果を挙げている。学科によっては作業上の課題に気付いて生徒相互に教え合う活動が少なく、指示されて作業することが多い状況にあり、なぜ作業を指示されたようにする必要があるのかなど、作業の目的や必要性を就労後の生活と関連させて丁寧に気付かせたり、理解できるようにする必要がある。

一方で、通常の学級に在籍する発達障がいのある生徒が中学校時代に不登校となり、本校に入学してくる事例が増えてきている。このような生徒は口頭言語能力や知識に比べて社会性の発達に遅れがあるため、障がい認識が進まず自分自身の自己像と実際の働く力とはギャップがあり、現場実習そのものに高いハードルを感じ、つまずきやすい。

生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、褒められたり感謝されたりする機会を増やし、生徒の自己有能感が高まる場面設定が必要になる。

(3) 地域との協働活動と地域生活への移行

生徒の実態を踏まえると、自己肯定感や自己有能感の獲得・向上に止まらず、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を積極的かつ計画的に設定する必要がある。平成28年度から取り組んできた校外での受注作業（役場での町内会配布物の仕分けサービスなど）や商工会事業による実習、個別実習など、社会との接点を強く意識する教育活動は、今後ますます重要な役割を果たすものと思う。

特に、校外で行う受注作業（地域との協働活動）は、地域の関係機関の業務を補助する活動として、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めるとともに、生徒がより一層地域に溶け込むことにつながる教育効果の高い教育活動である。同時に、関係機関の職員や町民は、障がいのある生徒との接し方を活動を通して自然に学ぶことが可能となるのみではなく、生徒が地域コミュニティを支える存在となることにより、卒業生が地域に溶け込んで町民との交流を楽しみながら就労する「共生社会の実現」に資することができると考えられる。

今金町では、「今金町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン及び総合戦略」（２７年度～３１年度）の基本戦略の第一位に「障がい者が地域産業の担い手としての活躍の場づくり」を挙げており、地域との協働活動は「共生社会の実現」を目指す国や道、町の施策とも合致する。

(4) 社会の一員として働く意識付け

一般就労と福祉的就労を合わせて、卒業生の７割が食品加工や水産加工に従事しており、製品は販売されて収益を上げることが求められる就労状況にある。生徒は一般就労した場合は特に組織が目指す目標に向かって努力することが求められ、福祉的就労においても収益性のある作業が今後求められることから、作業の方法を工夫したり、課題を発見して改善し収益を上げることを意識した学習活動の枠組みを設定することが重要になる。

また、生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、現場実習のみならず、商工会実習や校外で行う受注作業（地域との協働活動）を個人単位の学習としてではなく、現実の社会の企業活動を模擬的にイメージして、「組織の一員としての役割を担って働く活動」を行うことの方が、より課題を意識しやすくなると考える。生徒が実社会を想定した役割を担うことは、役割意識と責任をもって活動に取り組むことにつながりやすく、社会で働くために必要な事柄についての気付きや理解がより一層促進される。

そして、次期学習指導要領では、地域の公共システムにおけるコミュニティの拠点として、よりよい教育でよりよい社会を作ること在地域と共有する「社会に開かれた教育課程」であることが求められている。地域の関係機関の業務補助を行うことは、生徒の社会経験の拡充と実践的な働く力の獲得に資するばかりではなく、地域コミュニティの拠点としてよりよい教育を地域とともに作り、よりよい社会を作ることにつながる。

このようなことから、作業学習や受注作業、販売等について、「会社の仕事」として業務を行うという役割意識を生徒に持たせるとともに、仕入や在庫管理、販売・会計のプロセスを体験する学習の枠組み及びよりよい教育を地域と連携して進め共生社会を実現する「社会に開かれた教育課程」の具体的な学習活動の枠組みとして、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」を設立、運営することとした。

2 模擬株式会社 IMAKANE FACTORYの目的

(1) 生産活動による職業能力・技能・態度の獲得

学科の専門教科の作業学習（自学科作業、他学科作業）を通じて、勤労意欲の向上と働くことへの理解を深めるとともに、社会参加・自立に必要な職業能力・技能・態度を育成する。

(2) 共通教科の作業学習（職業・家庭）による進路動向に対応した職業能力・技能・態度の獲得

学科共通作業種（環境整備、流通・サービス、食品加工）の作業学習を通じて、進路動向に対応した幅の広い職業能力・技能・態度を育成する。

(3) 地域一体型デュアル実習による職業能力・技能・態度の獲得

デュアル実習Ⅰ（受注作業）は、町役場、総合福祉施設など地域の関係機関の業務の補助的なスタッフとして業務に当たる「地域の関係機関との協働活動」により、自己有能感を向上させるとともに、社会で働くために必要な事柄についての気付きを促し理解を深める。併せて、流通・

サービスや福祉サービスに関わる職業能力・技能・態度を育成するとともに、地域社会に奉仕する社会貢献活動として位置付け、生徒の社会参画の意識を高める。

デュアル実習Ⅱ（商工会実習）は、商工会事業による就労候補者が町内の農家・商店・水耕栽培工場等で実習を行い、多様な業務に対応できる柔軟性や社会性を含めた職業能力・技能・態度を育成する。

(4) 生産・仕入、販売実習による商業ビジネスの基礎的な理解の拡充

学科の定番の生産品のほか、学科の新商品や高等学校・社会福祉法人との開発商品、仕入商品の販売実習を通して、接遇なども含め、商品開発、仕入れ、生産と販売の計画、予算・決算に至る一連の商業ビジネスの基礎的・基本的知識や技能・態度を育成する。

(5) 交流及び共同学習の充実

北海道檜山北高等学校や北海道八雲高等学校と共同で商品開発を行うことにより、高校生と目標を共有した活動を活性化させ、交流及び共同学習を充実させる。

(6) 今金町の商店街の活性化に参画

多機能型事業所ワークショップいまかねと協働して商品化を進め、学校祭や販売会、町内商業施設で地域の土産商品として販売し、今金町の商店街の活性化に貢献する。

(7) 保護者との連携による学校教育の活性化

学校の教育活動であるとともに、PTA活動にも位置付け、模擬株式会社の活動に関わって学校と家庭の連携を深め、職業学科の教育を保護者との連携により、より一層活性化する。

3 目標

- (1) 生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気づき、その準備のために努力することができるようになる。
- (2) 生産・仕入と販売活動により、流通の仕組みや収益を上げるための工夫をすることができるようになる。
- (3) 業務遂行上の課題を明確にして改善策を提案できる力を身に付けさせる。

4 学習内容

(1) 各学科の専門教科の作業学習

○ 窯業科・産業科

窯業生産品の製造及び販売、印刷や情報の学習

○ 農業科

草花や野菜の栽培、収穫、加工、販売などの学習

○ 家庭総合科

織物・縫製製品作り、食品加工、クリーニング、紙漉や紙製品作り、販売などの学習

○ 生活家庭科

リサイクル、縫製製品作り、石けん作り、紙漉や紙製品作り、販売などの学習

(2) 共通教科の作業学習～学科共通作業

○ 環境整備

- ・ 町民センター、総合体育館、野球場等の環境整備
- ・ 校舎内外の清掃
- ・ 町内の美化活動
- ・ 役場、総合体育館へのフラワーレンタル（管理も含む）～農業科
- ・ 檜山北高校と合同の花壇整備～農業科
- ・ 校舎内外の除雪（高齢者宅の除雪も含む。）

○ 流通・サービス

- ・ 役場での町内会配布物の仕分けサービス（社会貢献活動）
- ・ 総合福祉施設での車いす清掃、レク等の補助（社会貢献活動）
- ・ 学校を会場とした役場等の主催事業の活動補助（社会貢献活動）
- ・ 地域課題を解決する「地域グループワーク」（地域イベントの企画・運営・参加）
- ・ 学校配布物の印刷・発送作業
 - 体育祭や学校祭の案内文書の印刷、折り込み、封入、宛先貼り、仕分け
 - 学校通信等の文書作成・印刷・発送
- ・ 飲食接遇サービス
 - 野外給食の材料発注と調理・サービス ■ 給食試食会等
- ・ データ入力等
 - 生産物の在庫管理や販売品の管理 ■ 仕入れ、製造計画、販売企画（POP制作）
 - 売り上げ集計、決算報告 ■ 今養版商品管理システムの開発と商品管理
- ・ その他

福祉避難所（高齢者・障がい者の二次的避難所）に指定された場合には、避難所運営の補助を検討する。

○ 食品加工

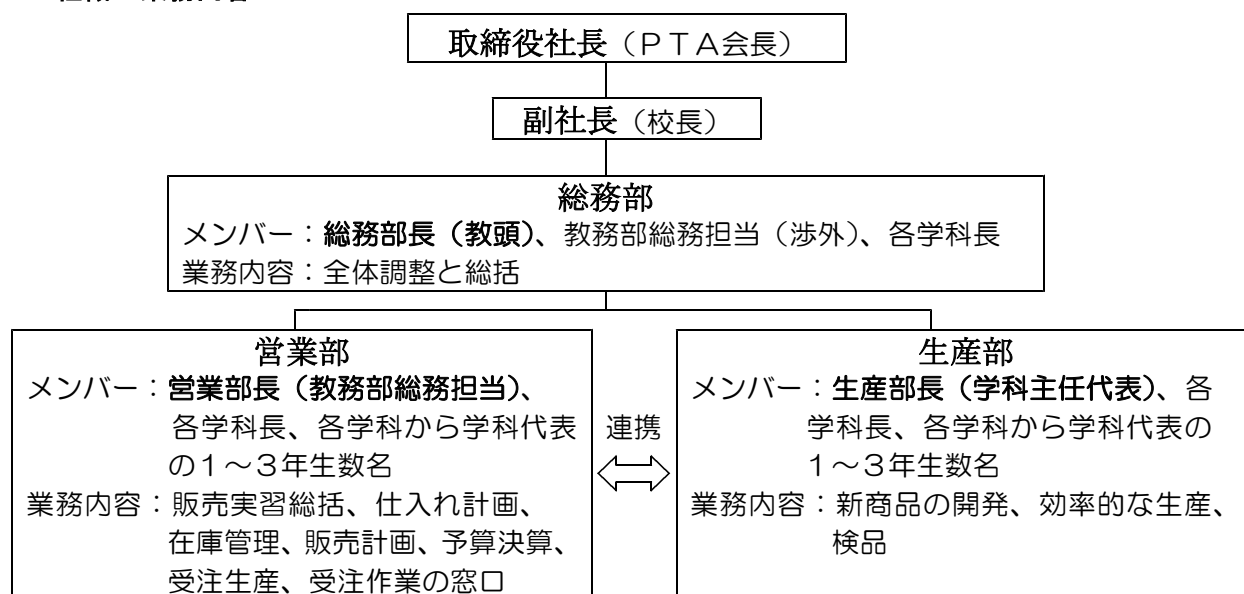
- ・ 外部講師による加工体験実習
毎年2月に1年、2年各学年ごとに、北海道檜山北高等学校で実施する。
- ・ ワークショップいまかねでの加工体験実習
- ・ 八雲高等学校との商品開発～家庭総合科
※商業教育フェアへの参加（9月）
- ・ 檜山北高等学校との商品開発～農業科・窯業科
※農業高校食彩フェアへの参加を検討
- ・ 見学旅行での販売実習（舞浜ベイホテル）
※検討、実施する。

5 学習の仕組み

- ・ 全生徒が一人500円の出資金をPTAから受けて模擬株主及び社員となる。なお、設立に当たっては、定款を作成する。

- 商品の仕入れは、町内外の実習先などから仕入れる。
- 販売は、学校祭、販売会、ひだまり（今金町内の販売所 社会福祉法人光の里経営）などで行う。
- 販売に当たっては、仕入れ値で販売し、売上金と残金をPTA会計に戻入する。
- 学科生産品と仕入商品の販売では利益を上げない形で実施するが、仕入や商品開発・販売の仕組みの理解を深めるため、仕入販売の商品に一定の利益相当額をPTAより、「商品開発費」として予算化し、次の商品開発のための学習に使用する。当面の間、商品単価の20%とする。
- 学科の生産品には「IMAKANE FACTORY」のロゴマークを印刷したシール等を添付などとして、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」の商品であることが分かるようにする。

6 組織・業務内容



7 組織・業務内容

会議名	メンバー	内 容
定例学科長会議 （毎月1回） （月曜日第2校時）	校長・教頭・教務部長・ 学科長（模擬株式会社経営会議）	• 全体の経営企画と調整、報告、改善
営業部会議 （毎月1回放課後）	各学科長、各学科から学科代表の3年生（班長）	• 各学科の作業計画・実習計画と改善 • 販売実習総括、仕入れ計画、在庫管理、販売計画、予算・決算、受注生産・受注作業の受付
生産部会議 （毎月1回放課後）	各学科長、各学科から学科代表の3年生（班長）	• 新商品の開発、効率的な作業体制や方法の検討、正確な検品方法の工夫
学科会議 （学年ごと）	学科長、班長	• 営業部会議と生産部会議の報告と協議 ※協同学習の活用

8 学習日程

(1) 会社の設立

当面の間、4月PTA総会にて定款の審議、決定、設立を行う。生徒はPTA総会後に会社設立の説明を受けることとする。将来的には、可能な範囲で生徒が営業部長や生産部長を担当することを想定して進める。その場合は、会社設立説明会を生徒対象に行った後に、生徒が担当する役職を決め、設立総会を実施する。

例 営業部長、生産部長、監査役などを各学科の代表生徒

(2) 「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」株主総会（学科交流会）（6月）

各学科代表生徒が年間の生産計画・販売計画（販売促進）、生産上工夫する点などを説明し、交流する。

(3) 学校説明会（6月）～中学校3年生対象～

各学科の2年生が、学科の生産計画・販売計画（販売促進）、生産上工夫する点などを説明する。その後、実際の作業体験を中3生にしてもらう。

(4) 商工会セミナー（9月・10月）

今金町商工会の講師から、商品を開発する上で大切な事項、学校祭や販売実習における仕入販売の方法や工夫などについて、指導を受ける。

(5) 学校見学会（10月）～中学校2年生対象～

学校説明会と同様に行う。 ※商業教育フェア（9月）、農業高校食彩フェア（10月）

(6) 学校祭での販売（11月）

(7) 町内報告会（2月）

各学科の生徒代表数名が、3年間お世話になった感謝の気持ちを込めて、役場の3階会議室で年度の生産計画・販売計画と結果、生産上工夫した点、来年度取り組みたいことなどを役場職員や後援会役員に報告する。

(8) PTA役員会（2月）

PTA役員会（取締役会）にて、年間の事業報告と監査、来年度の事業計画の承認を受ける。

(9) 校内報告会（株主総会）（2月）

各学科代表が生産品の在庫と売上、来年度の改善事項を報告する。併せて、仕入販売商品の売上げと決算を報告し、会社を解散する。

※販売実習では、販売促進のためのちらしや掲示物をパソコンも活用して制作する。

(10) 2学年販売実習（3月）

(11) 仮想店舗作り（通年）

各学科の生産品の製品カタログを本校ホームページ上で紹介する（販売はしない）。

9 帳票類と会計処理

帳票としては、「今養版商品管理システム」を用いて、仕入れ商品や生産品の入庫に当たっては、「入庫書」、「納品書」、「学科別在庫一覧表」を作成し、生産品を商品管理システムに登録する。販売会などのために出庫するときには、「出庫依頼書」、「出庫記録簿」、「配送伝票」を作成する。仕

入れ商品の場合には、「仕入明細書」、「売上明細書」、「現金出納帳」を作成する。生産品の場合には、「売上明細書」を作成する。

そのほか、「作業計画表」、「販売計画表」、「仕入れ計画表」、「受注作業受付票」などを必要に応じて整備する。会計処理には、仕入明細書、売上明細書、現金出納帳を用いて処理し「予算決算」など株主総会に必要な書類を作成する。

※「営業費支払明細書」は、当面の間作成しない。

帳票類の様式は、学科の実態に応じて表現を分かりやすく変更する。

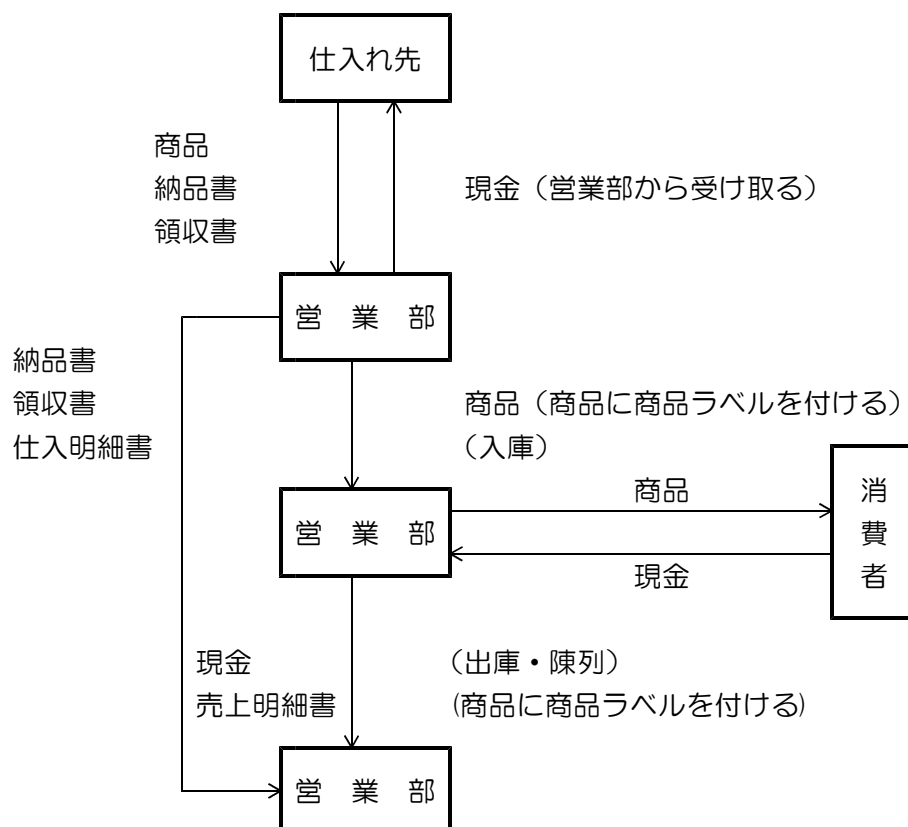
例 基本骨格の項目は可能な限り減らさずに、分かりやすい表現や視覚的な補助手段（イラスト等）を使い、「できる状況」作りを心掛ける。

10 諸帳簿の流れ

- (1) 商品を仕入れ、販売等を行った日には、営業日誌に記入し、担当教員に提出する。
- (2) 仕入明細書に記入し、商品と請求書を添えて担当教員（営業部）に提出する。
- (3) 仕入れ商品は、商品管理システムに登録し、商品ラベルを貼る。
- (4) 営業部より、仕入代金を受け取り支払う。
- (5) 仕入明細書を基に現金出納帳を作成する。
- (6) 販売後には、売上明細書を基に現金出納帳に記帳する。

11 帳簿組織等

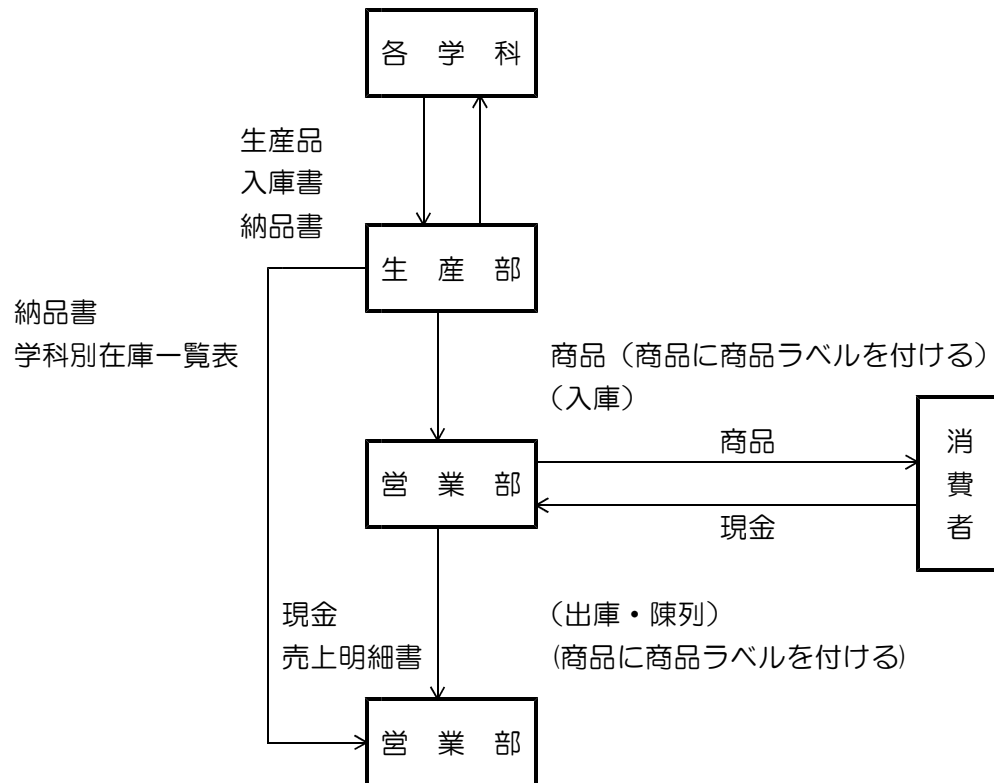
(1) 仕入商品



(商品番号)

- ① 窯業製品 ② 農産品（野菜・花） ③ 縫工製品 ④ 紙製品
⑤ 織工製品 ⑥ 石けん ⑦ アクセサリー ⑧ 仕入商品

(2) 学科生産品



12 自己評価

模擬株式会社の活動について、2月に生徒を対象にアンケートによる自己評価を実施する。

(質問例) 「あなたは、模擬株式会社の活動で、どのようなことがよかったと思いますか。」

13 年間指導計画

模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 年間指導計画

単元等	時期	ねらい	内 容	備 考
P T A総会	4月		定款の審議、決定、設立を行う。	
①（会社の設立説明会）	5月	会社の目的、業務内容、組織、年間計画などについて生徒に説明し、理解できるようにする。	※生徒が営業部長や生産部長を担当する場合 ・目的、業務内容、組織体制、年間計画 など。	H 3 0 年 度 以 降 の 実施
②（準備委員会）	5月		各学科ごとに3年生から代表生徒を選出する。	
③（設立総会）	6月	一年間の生産、販売、仕入、在庫管理等の概要を理解するとともに、活動の見通しと意欲をもてるようにする。	総務部長（教頭）が一年間の生産、販売、仕入、在庫管理等の概要を説明する。 営業部長、生産部長などの役職を選出する。	
④ 学科交流会（「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」株主総会）	6月	他学科の活動内容や工夫しているところを学ぶとともに、自学科の活動に対する意欲を高める。	各学科代表生徒が年間の生産計画・販売計画（販売促進）、生産上工夫する点などを説明し、交流する。	
⑤ 学校説明会	6月	自学科の学習活動の概要を中学校3年生に分かりやすく説明できるようにする。	各学科の2年生が、学科の生産計画・販売計画（販売促進）、生産上工夫する点などを説明する。その後、中学校3年生が実際の作業体験を行う。	
⑥ 商工会セミナー	9月 10月	商品を開発する上でのポイント、学校祭や販売実習における仕入販売の方法や工夫などについて、理解を深める。	今金町商工会の講師から、商品を開発する上で大切なポイント、学校祭や販売実習における仕入販売の方法や工夫、ショコラクッキーの一般販売の方法について学ぶ。	
⑦ 学校見学会	10月		学校説明会と同様に行う。 ※商業教育フェア（9月）（農業高校 食彩フェア〔10月〕）	
⑧ 学校祭での販売	11月	日頃の作業学習などの成果を発揮して、販売会が円滑に進められるように工夫するとともに、達成感や自己有能感を感じられるようにする。	各学科の生産品と仕入商品の販売と売上明細書の作成を行う。	
⑨ 町内報告会	2月	一年間の取り組みの成果を発表し、3年間お世話になった感謝の気持ちを表すことができるようにする。	各学科の生徒代表数名（3年生）が、役場で年度の生産計画・販売計画と結果、生産上工夫した点、来年度取り組みたいことなどを役場職員（後援会役員）に報告する。	
⑩ P T A役員会	2月		P T A役員会（取締役会）にて、年間の事業報告と監査、来年度の事業計画の承認を受ける。	
⑪ 校内報告会（株主総会）	2月	一年間の活動を振り返り、次年度の模擬株式会社への活動に向けた改善事項を話し合い、考えることができるようにする。	各学科代表が生産品の在庫と売上、来年度の改善事項を報告する。併せて、仕入販売商品の売上げと決算を報告し、会社を解散する。	
⑫ 2学年販売実習	3月	日頃の作業学習などの成果を発揮して、販売会が円滑に進められるように工夫するとともに、達成感や自己有能感を感じられるようにする。	各学科の生産品と仕入商品の販売と売上明細書の作成を行う。	

	学科共通作業	時 期
① 環 境 整 備	ア 町民センター、総合体育館、野球場等の環境整備	8月～3月
	イ 校舎内外の清掃	随時
	ウ 町内の美化活動	8月～3月
	エ 役場、総合体育館へのフラワーレンタル（管理も含む）～農業科	通年
	オ 檜山北高校と合同の花壇整備～農業科	毎年5月末
	カ 校舎内外の除雪（高齢者宅の除雪も含む。）	冬期間
② 流 通 ・ サ ー ビ ス	ア 役場での町内会配布物の仕分けサービス	毎月2回
	イ 総合福祉施設での車いす清掃、レク等の補助	毎月1回程度（レクは9月～）
	ウ 学校を会場とした役場等の主催事業の活動補助 ・ すっきりサークル特別編（今養編）18：45～19：45	2月
	エ 地域課題を解決する「地域グループワーク」（地域イベントの企画・運営・参加） ・ 農業科Aコープ販売（3年）5／17（水） ・ 春らんまん花いっぱいまつり5／21（日）～1学年 ・ にぎわい商店街7／8（土） ・ 町民体育祭7／9（日） ・ 夢縁日（商工会）7／21（金） ・ ぴりかマラソン（町教委）7／23（日） ・ 今金秋祭り（町教委、商工会、町内会）9／20（水） ・ にぎわい商店街（商工会）10／1（日） ・ 町民文化祭（太鼓クラブ、音楽部）10／29（日） ・ 学校祭11／19（日） ・ 雪明かり in 今金（商工会）2／14（水） ・ ぴりかふれあい歩くスキー大会（町教委）2／18（日） ・ 販売実習（2学年）3／15（木）	※下線部の行事に参加 他は可能な場合に参加
	オ 学校配布物の印刷・発送作業 ・ 体育祭や学校祭の案内文書の印刷、折り込み、封入、宛先貼り、仕分け ・ 学校通信等の文書作成・印刷・発送	体育祭・学校説明会（4月）、学 校通信（毎月）、学校見学会（8 月）、学校祭（10月）、卒業式 （1月）、入学式（3月）
	カ 飲食接遇サービス ・ 野外給食の材料発注と調理・サービス ・ 給食試食会等	7月 12・2月・3月
	キ データ入力等 ・ 生産物の在庫管理や販売品の管理 ・ 仕入れ、製造計画、販売企画（POP制作） ・ 売り上げ集計、決算報告	随時
	ク その他 ・ 福祉避難所（高齢者・障がい者の二次的避難所）に指定された場合には、避難所運営の補助を検討する。	
	ア 外部講師による加工体験実習（北海道檜山北高等学校）	2月
	イ ワークショップいまかねでの加工体験実習	12月～
③ 食 品 加 工	ウ 八雲高等学校との商品開発～家庭総合科 ※商業教育フェアへの参加（9／15）生徒2名参加予定	6月2回程度
	エ 檜山北高等学校との商品開発～農業科・窯業科 ※農業高校食彩フェアへの参加（来年度）を検討	9月2回程度

第3章 今養版商品管理システム

1 目的

学科共通作業では、自学科の製品や仕入商品の搬入と整理、受注内容に応じたピッキング作業*、梱包と発送などの流通・サービスに関する学習を行う。

* 伝票や指示書に従って、製品保管場所（倉庫）で商品や製品を取り出していく作業

流通・サービスの学習では、実社会に近いバーコードによる「商品管理システム」を構築した千葉県立特別支援学校流山高等学園の商品管理システムを導入し、本校の実情に合うように、システムを再構成した。原版はエクセル2010で稼働するマクロを活用したシステムであるが、本校のエクセル2016では正常に作動せず、流山高等学園の御厚意により修正プログラムを提供していただいた。「商品管理システム」のマクロで設計された各種操作ボタンの操作結果を検証しながら、比較的メンテナンスが行いやすい関数によるシステムの再構成を行った。この「今養版商品管理システム」を活用し、実社会により近いシステムで商品管理の学習を行い、卒業後の就労に役立てるようにとする。

2 バーコード

流山高等学園の商品管理システムは CODE39であるが、本校のバーコードリーダー付きのレジスターは、スーパー等で一般的に使用される JAN コードのため、JAN コードを使用することとした。JAN コードは、一般財団法人流通システム開発センター（コード登録管理グループ）で一元管理を行っており、本校における JAN コードの使用方法について協議した結果、スーパーに流通させる場合とは異なるため、「20」で始まる13桁で構成する「インストアコード」という方法で行うこととした。

商品コードの表記			
20-01（学科）	-01（大分類=グループ）	-001（小分類=商品名）	-050（単価、50円）
商品コード：「200101001050」			
JAN コード			
			
2 001010 010506			

注1 JAN コードは、全13桁のうち、最後尾の数字はチェックデジットを入力する。チェックデジットとは番号の『誤読』『誤入力』『偽造』を防止するため、コードに特定のアルゴリズムを適用して計算する数値等をいい、ここでは次の自動計算をしている。

チェックデジット自動計算

入力	文字列変換	偶数位置×3	奇数位置	合計	下1桁	-10	チェックデジット
201403010400	201403010400	36	3	39	9	1	1

↓

JANコード		1桁	2桁～7桁	8桁～13桁	2桁～7桁	8桁～13桁	文字列生成
2014030104001	2014030104001	2	014030	104001	01D@3@	QPTPPQ	{01D@3@ QPTPPQ}

注2 JAN コードは以下のフリーソフトでエクセルのアドイン「JANCODE-nicotan 用文字列変換シート」を使用し、表示は JAN コード用のフリーフォント「JANCODE-nicwabun」を使用した。

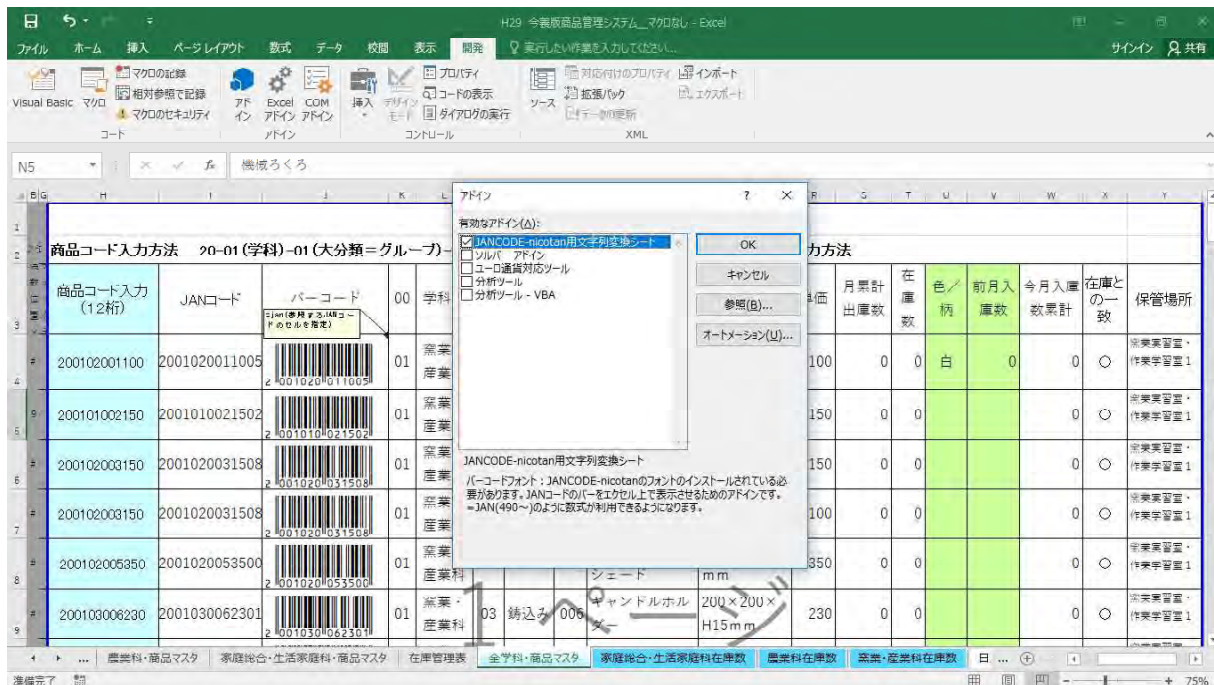
Copyright (c) 2015 nicotan

Released under the MIT license

<http://opensource.org/licenses/mit-license.php>

3 エクセルのセットアップ

- (1) 使用する PC でエクセルを起動させ、ツールバーの「開発」をクリックし、さらに「Excel アドイン」をクリックすると、「有効なアドイン」画面で、「参照」をクリックする。「エクセルのセットアップ用」フォルダを開いて、「JANCODE-nicotan 用エクセル」をクリックし、表示された「JANCODE-nicotan 用文字列変換シート」にチェックマークを入れる。



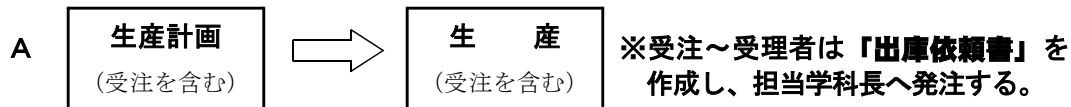
- (2) 「エクセルのセットアップ用」フォルダを開き、「JANCODE-nicwabun」という JAN コード用のフリーフォントのファイルをクリックして画面上にフォントが表示されたら、「閉じる」をクリックする。
- (3) エクセル上で「全学科・商品マスタ」のバーコードのセルに、「=jan(参照する JAN コードのセルを指定)」を入力する。
- (4) バーコードのセルのフォントを「ジャンコードにこたん」※ に設定する。

※ フォント名



4 入庫・出庫の流れ

(入庫)



B 学科作業

「全学科・商品マスタ」に必要な製品情報を入力する。

全学科・商品マスタ
ア 商品コード入力 20-01 (学科) -01 (大分類=グループ) -001 (小分類=商品名) -050 (単価, 50円) イ 学科名、大分類 (グループ・・・製法等)、小分類 (商品名)、規格、単価、色／柄の入力 ※この内容が製品情報 (カタログ) となる。

C 入庫～「流通・サービス」(学科共通作業)

入庫 (生産部班長・各学科長又は担当教師)	荷受け・バーコード発行 (生産部班長・各学科長又は担当教師)
○ <u>班長：「入庫書」作成</u> ※枚数が多い場合、他の生徒も作成する。 ○ <u>製品</u> ・ <u>所定の保管場所に搬入する。</u>	1 各学科長又は担当教師：「全学科・商品マスタ」に入力 ・ 新製品→製品データを入力 ・ 既存製品→色／柄、前月入庫数 (現状の在庫数) を入力 2 <u>班長：「全学科・商品マスタ参照一覧」のシートを見て、該当製品の商品コードを「入庫入力シート」に入力 (コピーペースト) する。</u> ① 商品コード ※①入力時、商品名、色等が自動表示 ② 個数合計 ③ 担当者 ※学科・学年でプルリストから選択 ④ 新規入庫／再入庫 ※売れ残りが再入庫の対象 3 各学科長又は担当教師：「入庫用ラベル印刷」シートで商品ラベル印刷する。 4 <u>班長：商品ラベルを製品に2枚ずつ貼付する。</u> 5 各学科長又は担当教師：「納品書印刷」シートで納品書を印刷する。また、各学科の「〇〇科在庫数」シートで在庫一覧表を印刷する。 6 <u>生産部班長は「生産部ファイル」に「入庫書」・「納品書」をとじる。併せて、営業部班長に「納品書」と「〇〇科在庫一覧表」を渡し、「営業部ファイル」にとじる。</u> 7 <u>班長・各学科長又は担当教師：製品を所定の保管場所に入庫する。</u>

※下線部生徒が担当し、教師は助言と点検を行う。



入庫準備

(出庫)

D 出庫～「流通・サービス」(学科共通作業)

出 庫

(営業部班長・各学科長又は担当教師)

○ 班長：「出庫依頼書」作成

※枚数が多い場合、他の生徒も作成する。

※下線部生徒が担当し、教師は助言と点検を行う。

出 荷

(営業部班長・担当教師)

1 班長・担当教師：出庫製品のピッキング

・「出庫依頼書」を見ながら、棚から製品を集める。

2 班長：商品ラベルを製品から1枚ずつはがし、「出庫記録簿」に貼る。

3 班長：「出庫入力シート」に出庫製品を入力する。

4 各学科長又は担当教師：「配送伝票印刷」シートで配送伝票を印刷する。

5 営業部班長は「営業部ファイル」に「出庫依頼書」とじる。併せて、生産部班長に「配送伝票」を2枚渡し、そのうち1枚に受け取りサインを記入してもらい、「営業部ファイル」にとじる。

6 生産部班長は「生産部ファイル」に「配送伝票」とじる。

5 その他

(1) 再入庫

売れ残った製品など一度「出庫」したものを再度「入庫」する。バーコードシールが1枚貼ってある「再入庫」の製品を再入庫する。

(2) 製品カタログの作成

学校ホームページに掲載する。

第4章 実践研究の結果

1 第1回学科全体交流会（模擬株式会社 IMAKANE FACTORY総会）

平成29年6月7日（水）に「第1回学科全体交流会」兼「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY 総会」を行った。始めに高嶋校長から、「模擬株式会社として作業をしていくことで、社会の仕組みや会社の仕事がより自然に身に付くので、生徒全員が協力し合って素晴らしい会社となるようにしてほしい。」と挨拶があり、次いで、営業部長の教務主任から、株式会社の定款、組織、年間の学習計画の説明が行われた。

窯業科・産業科、農業科、生活家庭科・家庭総合科の代表生徒が、学科の年間の生産計画と販売計画を発表し、専門家（陶芸家）の指導を受けながら製品生産の工夫をすることや、八雲高等学校と「ショコラクッキー」の味とパッケージを共同開発することなどが報告され、承認された。窯業・産業科では、陶芸の専門家（窯業アドバイザー）から学校祭で販売する商品の絵付けの方法を学んでいることが紹介された。農業科は農家（農業アドバイザー）から指導を受ける予定である。

2 学校祭の販売活動に向けて

(1) 商工会セミナー

学校祭の学科販売と仕入れ販売の事前学習として、10月に学年ごとに1回ずつ「商工会セミナー」を実施した。講師は、本校の学校評議員でもある（有）小川食品取締役の小川ひとみ氏である。道南産の鶴の子大豆を使った付加価値の高い豆腐や麺類などの製造を行っており、日頃の会社業務の経験を基に授業を行っていただいた。具体的には、次の目的と内容に沿って、プレゼン資料を提示しながら、具体的な内容を話していただいた。

① 目的

- ・学校祭や販売実習における仕入れ販売の方法や工夫について理解を深める。
- ・商品を開発する上で大切な事項について理解を深める。
- ・ショコラクッキーの一般販売の仕方について理解を深める。

② 内容

- ・仕入れ販売の方法や工夫
- ・販売や商品を開発する上で大切な事項
- ・ショコラクッキーを一般販売する際に大切なこと
- ・コスト計算

③ 生徒の感想

授業にアンケートを行い、生徒の率直な思いや考えを次のとおり整理した。生徒は主に「販売者としての姿勢」、「接客」、「商品」について感想を述べている。

表1 商工会セミナーの主な感想

項 目	内 容
販売者としての姿勢について	• きれいな服装や笑顔で挨拶や丁寧な言葉遣いをすることや良い印象を持てただけのような言葉がけが必要である。そして、販売の練習をしっかりと行って本番に臨みたいと思った。
接客について	• 自分の商品とは関係のない話で声をかけられても必ず対応することが大事である。 • 販売では、お客さんの前で暗い表情だと、「あの子、元気なの？」と思われるかもしれないのでもっと明るくしようと思いました。 • 製品を買っていただくには買ってくれる人のことを考えて丁寧に作る。 • 自分は販売の際にお客さんから声をかけられる前に自分から声をかけていきたいと思った。 • 自分の学科の商品を買わない方にも「また、よろしくお願いします。」と声をかけたいと思った。 • お客さんと接客をする中でお客さんの求めているものを考えて、商品を買ってもらえるような接客をしたい。 • 接客の際の敬語や声を大きさが大切である。
商品について	• 新しい種類の商品を作り続けたり、その商品にこだわりをもったりすることが大事であることがわかった。 • お客さんのことを思いながら製品作りをすることが大切であることがわかった。 • 良い商品を作るために時間を何年もかけて、工夫をたくさん重ねたことはすごいと思った。
その他	• お客さんが見やすいような陳列が大事であると思った。 • セミナーを聞き、学校祭に向けて忙しくなるので指示をしっかりと聞き、一生懸命がんばりたいと思った。 • 自分の作ったものを買ってもらうことでやりがいが生まれると思った。 • 食品に関しては衛生管理が大切であると思った。 • 自分のためではなく、誰かのために働くことが大切であると思った。

生徒たちは、商工会セミナーによって、社会で実際に商売をしている方から販売に関する内容を聞くことで、日頃の製品づくりだけでは学ぶことができない事柄を学ぶことができた。そして、生徒たちはこの学習で学んだことを意識して、学校祭において学科で製作した製品の販売や仕入れ商品の販売を行うことができ、販売活動に向けた貴重な動機付けとなった。

(2) 学校祭に向けたチラシづくり

学校祭で各学科が販売する主な商品の中から、学年ごとに2点ずつ、保護者にPRしたい製品と仕入れ商品の品名と販売数と単価を盛り込んで、チラシを作成した。作成に当たっては、製品の紹

介は生徒が考えて、各製品を写真入りで見やすく注目を浴びやすいコメントを付けて、パソコン入力することができた。今後は、模擬株式会社代表生徒が、一層主体的に取り組めるように工夫が必要である。

(3) のぼり作り

① 目的

- ・模擬株式会社としての販売会で、販売者がより一層注目されるようにする。
- ・生徒が模擬株式会社としての販売であることを意識できるようにする。

② 内容

「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」の取り組みの一つとして、代表生徒を中心にしてIMAKANE FACTORY ののぼり作りを行った。のぼり作りは、複数の原案を代表生徒全員が原案の写真を見ながら、「のぼりの色と文字の色のバランスが良く、離れたところから見ても目立つのぼりを選ぶ。」という生徒たちが考えたテーマに沿って話し合った。そして、旗の色が薄い水色で文字の色がオレンジ色ののぼりが一番目立つという意見が多く出て、町内の印刷会社に発注した。今年の学校祭では、各学科の生産品販売の会場や仕入れ商品の会場にのぼりを設置し、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」をアピールした。

③ 評価

- ・来校された地域の皆様や保護者の皆様からは、「立派なのぼりですね。」「とても目立ちますね。」という御感想をいただいた。
- ・のぼりの作成に関わった生徒たちは、自分たちで話し合ったり、考えたりしたのぼりが形になったと大変喜んでいて。

今後は、校内や町内で開催される販売会をはじめ、札幌で行われる北海道高等学校商業教育フェアや今金町をアピールする場面で活用したいと考えている。

3 生徒の振り返り

(1) 平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違い

平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違いについて、2・3年生の生徒にアンケート調査を行った。生徒は、主に仕入れ商品やのぼりの制作、商品管理について違いがあったことを挙げている。アンケートの結果は、次のとおりである。

表2 平成28年度学校祭と平成29年度学校祭の違い

項 目	内 容
仕入れ商品に関わって	・仕入れ商品を販売することになり、町内、道内、道外から商品を取り寄せた。また、販売する場所も増えた。
商品管理	・商品管理をするようになり、販売する商品にバーコードを貼るようになった。

項 目	内 容
商品の販売方法	・（お客さんの負担を抑えるために）移動販売が行われた。 ・学科販売では、学年ごとではなく、1～3年生で協力し、学科全体で販売することができた。また、移動販売はたくさんの人と話することができたり、お客さんの商品に対する本音を聞いたりすることができたのでとても良い経験になった。 ・お客さんの邪魔になっていた。小さいお子さんにも危険な感じがした。（角が当たりそうで）時間をずらして移動販売を行う。体育館や邪魔にならない場所で販売するなどの工夫が必要である。
商品開発	・豪雨で被害を受けた九州地方の粘土の名前を学習し、その粘土を使って製品を作った。 ・学校祭で販売する商品（チョコっとひといき）を他校の生徒と一緒に考えた。 ・IMAKANE FACTORYのロゴが入ったカップを製作し、販売した。 ・学年の枠を越えて一緒に製品を作ることはできないか？
チラシ	・商品を紹介するチラシを作った。
商品の数量	・販売する商品の数が増えた。 ・自分たちのやるが増えた。
商品の質	・昨年に比べて販売会で販売する商品の質が高くなった。来年度はもっと素晴らしいものにしたい。
その他	・先生方だけで考えるのではなく、自分たちだけで考えてあまり先生たちに頼らないようにした。 ・IMAKANE FACTORYがスタートし、仲間と話し合いをするときにたくさん悩んだが、担当する商品が全部売れてとてもうれしかった。 ・外部とのつながりをもっと持ちたい。野菜の販売、お客さんが欲しいものを作り、届けることや全学科のコラボレーション商品を作りたい。学科内の全学年で協力して商品を作りたい。

(2) 模擬株式会社になる前後の意識の違い

1月末に2年生32名、3年生20名を対象に模擬株式会社の取り組みがどのような効果をもたらしたのかについて、アンケート調査を行った。調査用紙と主な結果は次のとおりである。なお、回収率は、90.3%である。

模擬株式会社IMAKANE FACTORYアンケート

(アンケートをするねらい)

平成29年度に模擬株式会社IMAKANE FACTORYができて、学科の作業が「会社の仕事」となりました。学科交流会(模擬株式会社総会)を6月にして、販売会では、学科の製品と仕入れた製品も販売しました。作業学習が「会社の仕事」になってよかったことを教えてください。

(アンケートに答える前に読んでください。)

1 株式会社と模擬株式会社はどこがちがうの？

株式会社～役所に会社を作ったことを、決められた用紙に書いて出す。お金が30万円くらいはかかる。
模擬株式会社～用紙を出さない。

2 会社ってなに？

会社は、人と同じように、物を作ったり、買ったり売ったり、税金を納めたりすることができる。会社は、利益(もうけ)をあげるために、物を作ったり、買ったり売ったりする。模擬株式会社では、税金は納めなくてよい。

3 模擬株式会社IMAKANE FACTORYでは、利益をあげているの？

学校で取り組むため、利益をあげない。しかし、それでは、会社にならないため、PTAから商品1つ当たり、商品の値段の20%を利益として模擬株式会社に渡す。

4 今年の模擬株式会社IMAKANE FACTORYの仕事ってなに？

(1) 各学科の専門教科の作業学習

① 窯業科・産業科

窯業製品(皿、コーヒーカップなど)の製造・販売や印刷など

② 農業科

草花(ミニシクラメンなど)や野菜(タマネギ、じゃがいもなど)の栽培、収穫、加工、販売

など

③ 家庭総合科

織物(おり機で作るもの)・縫製製品作り(ステンシルふきん)、食品加工(ショコラクッキー)、紙すきや紙製品作り、販売など

④ 生活家庭科

リサイクル、縫製製品作り(ステンシルふきん)、石けん作り、紙すきや紙製品作り、販売など

がっかきょうつうさぎょう
(2) 学科共 通作 業

かんきょうせいび
① 環 境整備

- ア 町 民センター、総 合 体 育 館、野 球 場などの環 境整備
イ 校 舎内 外の清 掃
ウ 町 内の美化活 動
エ 役場、総 合 体 育 館へのフラワーレンタル（管理も）～農 業 科
オ 檜山北高 校と合 同の花壇整備～農 業 科
カ 校 舎内 外の除 雪

りゅうつう
② 流 通・サービス

- ア 役場での町 内 会配布物の仕分けサービス
イ 「としべつ」での 車 いす清 掃、レクなどの補助
ウ 地域（今 金 町）の課題を解 決する「地域グループワーク」（地域イベントの企画・運 営
・参加）
エ 学 校配布物の印 刷・発 送作 業
・体 育 祭や学 校 祭の案 内 文 書の印 刷、折り込み（紙を折ること）、封 入（封 筒
に入れること）、宛 先シール貼り、仕分け
・学 校通 信などの印 刷・発 送
オ 飲 食接 遇サービス
・野 外 給 食の材 料 発 注と調 理・サービス ・給 食 試 食 会など
カ データ入 力など
・製 品の在庫管理や販 売 品の管理（商 品 管 理システムへの入 力、入 庫（製 品や
仕 入 商 品を商 品 管 理システムに登録して保管場所に運び保管すること）、出 庫（
製 品や仕 入 商 品を商 品 管 理システムに登録して保管場所から販 売のために運び
出すこと）
・仕入れ、製 造 計 画、販 売 企 画（のぼり制 作）
・売 上 げ集 計、決 算 報 告

しょくひんかこう
③ 食 品 加 工

- ア 外部講師による加工体 験 実 習
毎 年2月に1 年、2 年各 学 年ごとに、北 海 道檜山北高 校で 行 う。
イ 北 海 道八雲高 校との合 同の商 品 開 発～家庭総合科
※商 業 教 育フェアへの参加（9 月）
ウ 北 海 道檜山北高 校との商 品 開 発～農 業 科・窯 業 科

※シフォンケーキ

ここからアンケートに^{こた}答えてください。

1 作業学習が「会社の仕事」になってから、作業学習の時間に「会社の仕事」をして、^{まな}学
べたことは何ですか？

「会社の仕事」ではないとき（平成27・28年度）とくらべて、^{まな}学
べてよかったこと
^かを書いてください。

--

2 みなさんの意識^{い し き}や考え^{かんがえ}は、模擬株式会社^{も ぎ かぶしきがいしゃ}になって、どのようにかわりましたか？

--

3 作業学習が「会社の仕事」になってよかったかどうか、下の1～5の数字^{すうじ}のなかで、
「これが自分の気持ちだ。」^{おも}と思う番号^{ばんごう}に○をつけてください。

5	4	3	2	1
(とてもよかった)	(よかった)	(ふつう)	(あまりよくなかった)	(わからない)

表3 生徒の振り返り

1	作業学習が「会社の仕事」になってから、作業学習の時間に「会社の仕事」をして、学べたことは何ですか？ 「会社の仕事」ではない時（平成27・28年度）とくらべて、学べてよかったことを書いてください。
2 年	（産業科） • ない。 • よくわかりませんでした。 • 車イスやグラウンド等の経験は生かせると思いました。 • 仕入れ販売の大変さがわかりました。 • よくわからなかった。 • よくわかりませんでした。お菓子作りが出来てよかったです。・檜山北高校でのおかし作りが楽しく学べた。 （農業科A組） • そもそも作業学習が「会社の仕事」になっていたのが知らなかった。 • レベルアップができるようになる。スピードが違うとおもう。 • 特にありません。 • 1年の時とくらべて仕事の内容が同じなので違いがわかりません。 • 檜山北高等学校での食品加工でクッキーを作り、班の仲間と分量とかを話し合って協力できたことです。 • 会社の仕事になってからはかわった気がしなかったの、何も学んでいないと思います。 • 平成27・28年より1つ1つ丁寧に作業をしてお客様に楽しく買い物をしてもらえるようなことを学べたと思います。 • コミュニケーション力をつけたい。もう少し自分たちで、新しいものをつくりたい。 （農業科B組） • 販売の声かけをしたことです。 • 敬語で話をする。 • 声かけができた。 • よくわからないです。 • 前と全然変わってない。 • コミュニケーションをする大切さを学んだ。 • 花など会社の商品と思って、より丁寧に扱うことを学びました。 （生活家庭科） • クッキーを大切にしないと割ってしまうことが学びました。 • つぶらやで品をとりに行きました。今までと変わりました。 • 仕入れ商品で割れないでおくことができた。 • つぶら屋さんから仕入れ商品を購入してお客さんとコミュニケーションをとりました。 • 仕入れ商品とは売っている商品。 • 在庫管理 仕入れ商品（つぶら屋さんに商品をとりに行った）。
3 年	（産業科） • 初めの方は自分だけの仕事をたんたんとしていただけでした。すべてがそれだったわけではありませんが、それが多かったと思います。2年生になってからは、一つの組織として動いたので、私達にとったら2年生の頃から会社の仕事でした。その時は、もちろん初めのような動きではだめなので何をするにも、これからの予定を見てどの時にこれをやろうなどと決めていました。他には組織図を使ってわかりやすく動いたりなど本当に将来に近い動き方をしていました。先生方からもあまり指示を出されることなく、ほとんど自分達でなんでも進められるようにしてきました。今では、まだまだですが、周りの力がなくても動けるようになったし、自分の出来ることと出来ないことの区別ができるようになりました。 • 1年生の頃は、個人個人で作業をしたりしていました。また、報告・連絡・相談もあまりやらないで、コミュニケーションもあまり取っていませんでした。その他にも、学校祭の製品作りが間に合わなく残業もたくさんする日がありました。それに比べて、2・3年生では、残業をしないためにも作業の見通しを毎日書くようになり、1つ作る皿に何分かかるという時間が分かり、自分の仕事のペースをつかむことができました。また、報告・連絡・相談も仲間や先生にする時の仕方を知ることができました。どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で先生方が教えてくださったので、意味なども理解しながら動けるようになりました。今までは個人でやってきた作業も仲間とペアやグループを作って、会社の組織みたく動くことが増えたので、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになりました。また、すぐに慣れない部分もあったけど、先生方に組織図の理解の仕方を聞きに行ったりしたので、今では自分でも書けるようになりました。2・3年生の時のHRでは、社会に出た時に困らないように社会の仕組みやお金を使う優先順位などをくわしく教えてくれて勉強になりました。

また、各教科の目標を書き、できるようになるための手立てや自分の障がいと向き合う時間も作ってくれたので、逃げずに障がいを知って自分自身を知ることができて、少しずつだけど自分のことを好きになっていくことを学びました。また、数学のときには作業と組み合わせた授業をしてくれたので、作業がやりやすくなりました。

- 指示内容を理解している時と理解していない時の違い。指示を理解していない時は何もわからないので動けなかったけど、指示をしっかり理解しているとスムーズに動けて、仕事も早めに終わることができた。結果、理解していることで、仕事が早く終わること、どんな時も理解していたほうが、動きやすいことを学びました。報告・連絡・相談をどんな時でも使うこと、使わないといけないこと、3つのことをすることで、上司や周りに人が困らないし、気持ち良く仕事ができることを知りました。3つのことはどんな場所でもやらないといけないし、やった方が人との信頼、人間関係が少しでもつくことを学ぶことができました。
- 今まででは自分の目線でお皿を作っていましたが、お客さんのことを考えて丁寧に作ったり、形やデザインにこだわって作り、買ってくれたお客さんに喜んでもらえる嬉しさや、仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、うまく作るために先生方にアドバイスをもらったりして、質のよいもの（技術）など学びました。
- 1年生の時は、お皿を作るにあたって個人でどんどん作って、全体の調整を先生方がしていただいたんですが、2・3年生になって、組織図を使ってみんなと関わる場面で、自分もしっかり全体のことを把握しなきゃいけないと意識するようになった。また、全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いてわかっている状態にしたり、情報共有をしないとわからないまま仕事を進めてしまうので、待つのではなく、自分から聞くことの大切さを知った。他に、2年生の時から見通しを立てることをやり、期日がわかっている、そのために1つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをしたことで、仕事の進み具合がわかったり、他にやるべきことは何かわかるようになりました。
- （1年）丁寧に皿を作っていなかったこと。期限内に何枚作るという納品日がなかった。校外からの受注品がなかったこと。1・2・3年と作業の交流がなかったこと。作業だけの振り返りをしていたこと。自分一人が作る製品だけを気にしていたこと。確実に仕事をしていなかったこと。メモにまとめたことを家に帰ったときに、まとめ直していなかったこと。（2・3年）期限内に皿を作るようになったこと。校外からの受注品が増えたこと。2グループに分けて仕事をしていたこと。見通しを立てて、仕事をしていたこと。今日の自分の給料を増やすための行動、仕事をしていたこと。今日1日の振り返りをしていたこと。全体像を把握して行動し、他の人の仕事の手伝いをしたこと。自分の役割を果たすために、責任を持って確実に仕事をすること。迷惑をかけないために、メモしたことをまとめ直していたこと。
- 先に仕事をして、掃除・準備は後回しにすること、トイレに行くタイミングを考えられたことです。

（農業科）

- 会社の仕事になってから、自分たちが作る製品などでもっと丁寧に、この期日まで終わらせなきゃいけないなどのことを学びました。会社の仕事ではない時は、製品を作って学校祭で販売をして、お客様に買ってもらえるうれしさなどを学べたところであり、また利益ができ、良かったと思います。
- 製品販売（会計＋説明）行事等の会議、清掃のやり方
- 毎年やっているが、一つの会社として販売して売る難しさ。どれだけ先のことを考え行動をして、どれだけ多くの仕事をするのか。
- 今まで先生に頼っていたことを自分たちもできるようになったこと。やり方も変わり、自分の考え方もどうしたらいいか前より考えるようになりました。
- 檜山北高生たちと花だん整備などをして、町の役に立てたりすることができて良かったです。
- そうりをつくれたこと。

（生活家庭科）

- 働くため。 • 分かりません。

	・与えられた時間までに片づけや掃除を終わらせることができました。同じ失敗を何度も繰り返さないこと。 ・一つ一つの仕事に知識を持てるようになった。27・28年度と比べて、織り機を使って1年生が製品を作るなど、技術面がアップして家庭科として学べるが増えたと思います。 ・会社の仕事ではない時は、良い製品を作って、売って、反省して、で終わってしまい、社会というものと触れ合う機会が実習ぐらいしかなかったが、イマカネファクトリーができてからは、会社としてやることになって、「社会ってこんな感じなんだー」ということが学べた。 ・今年は販売もあったし、ポスターもいつもと違う色だったり、デザインも違ったので今年の方が学べたと思いました。
2	みなさんの意識や考えは、模擬株式会社になって、どのようにかわりましたか？
2年	(産業科) ・かわっていません。 ・かわりませんでした。 ・何も変わらなかったです。 ・特に変わりません。 ・かわってない。 ・かわっていません。 ・特にかわってない。 (農業科A組) ・わかりません。 ・あまりかわらないです。 ・あまりかわっているところはありません。 ・今までどおり、商品なので、丁寧にやるようにしています。 ・私達が育てた野菜やドライフラワーを販売することによって、お客さんに喜んで買ってもらったり、自分の意欲を持って、売り上げ向上を目指すために熱心に働いている。 ・自分たちの意識や考えなどが会社の仕事となって、未来へ役に立つ日へと変わった気がします。 ・わかりません。 ・特にかわっていません。 ・自分たちで作業をつくりたい (農業科B組) ・会社は大切と思いました。 ・どのように仕入れをするか、知ることができました。 ・周りとの協力ができるようになってきた。 ・わからないです。 ・先を考えて行動する。 ・合同学習や販売が多くなった。 ・作業学習の一つの作業も会社の仕事と思ってやって、会社のために貢献していると思って作業するところが変わったと思います。 (生活家庭科) ・わからないです。 ・作業は作業で分かりません。 ・特に何もありません。 ・わかりません。 ・かわってない。 ・作業で作業をやっていたので、わかりません。
3年	(産業科) ・会社になる前からですが、少しずつ自分一人でこの作業が成り立っているわけではない。周りの人がいるから今があるんだと思うようになりました。実際に社会に出たときのことを想定して動くことが何度もあり、お客様とのやり取りが発生する場面が何度もありました。他の学校には絶対できないことだと思えます。 ・1年生の頃は、めんどくさい、やりたくないなどと思っていることが多かったが、2・3年生になってからは、必要なことの確認、期限、日程、報告・連絡・相談などを自分からするようになりました。また、今では、上司や周りに迷惑をかけたくないと思うことが増えました。1年生の頃に思っていたことも今ではなくなり、自分一人でもできるようにしないと、と考えるようになりました。 ・今後、働く上で必要なことで、前はそこではなく、「うまく作れるようになりたい。」「楽しくやりたい。」でしたが、今は、自分の気持ちよりも相手のことを考えて、お皿を作ったり上司の人や周りに人が困らないような言葉や、行動をしないといけない、一番の優先順位（たとえば、卒業制作よりも販売会の方が先に終わらせるなど）などを考えられるようになったと思います。よかったに○をつけたのには、理由があります。今まで、1年間、2年生の最初は「作業だけ」みたいな感覚で、私は思っていました（仕事を）。しかし、2年生のときから、すべて授業は仕事だと先生に言われてきて、今の考えでは、今まで学んできたことは間違いではなく、自分が少しでも変わったこと、たとえば見通し（いつまでに終わらせないといいかないかなど）、優先順位（自分のことより、周りのこと優先、人がかかわっていること）、報告、連絡、

相談（仕事がしやすい環境をつくるために、また、周りの人を困らせないなど）、確認もしすぎると、周りの迷惑になることや、自分の役割をはたしてから自分のためになることを考える、行動するなど、今まで2年間一日中取り組んできました。今は、作業だけではなく、全ての授業を仕事だと思っているので、よかった、に〇をつけました。

- 1年生のときと比べて、製品を作る時にお客さんのことを思って丁寧に作るようにしたり、デザインや色なども自分で考えられるようになりました。また、時間を意識して取り組んだり、見通しとっていただいたの流れを立てたりし、先のことを考えながら取り組めるようになりました。その他には、失敗が怖くて何もやらなかったり、人に頼ってばかりいましたが、挑戦することによって今までできなかったことができるようになったり、与えられた仕事は最後まで責任を持って役割を果たさなくちゃいけないと思うようになりました。失敗したら、それを取り戻すために周りのために何かできることを探して取り組んだり、修正していく力もできるようになりました。
- 最初は、模擬株式会社ということで、すごくかたいイメージでやりづらい感じはありましたが、でも自分たちのやっていることを会社に役に立ちたいという思いに変わったり、将来働く上でも大事になってくるので、とても勉強になりました。また、自分の役割を理解しないで物事を進めしまうと、それが失敗につながってしまうので、自分のこともそうだけど、周りのために何かしたり、迷惑をかけたくないという思いを持つことで仕事をするときに意識や考え方がだいぶ変わりました。何回も見通しを立てることをやっていくことで、今度は見通しを立てなくてもいいことがあるので、必要な時に見通しを立てることの大事さを学びました。3年生のとき、PDCAサイクルをやり、今中生との交流学习があって振り返りシートを書いた時にP、D、C、Aをもとに振り返りをしたことで、失敗したときに次どうしなければいけないか手立てが考えやすかったです。また、このような振り返りをする中で、自分はこういう時に失敗してしまうんだと、後先のことを予測できるので、振り返りはとても大事だなと思います。
- 失敗をしたら、他の人に迷惑がかかるので、迷惑をかけないようにしたこと。確実な仕事をするために、聞かれたことを理解すること（できていなかったら、もう一度聞く）。1・2・3年の交流が増えてより多くお客さんに満足のいく皿を作ろうと思ったこと。
- 自分についてはよく分かりませんが、他の方々の見通しが成り立っています。

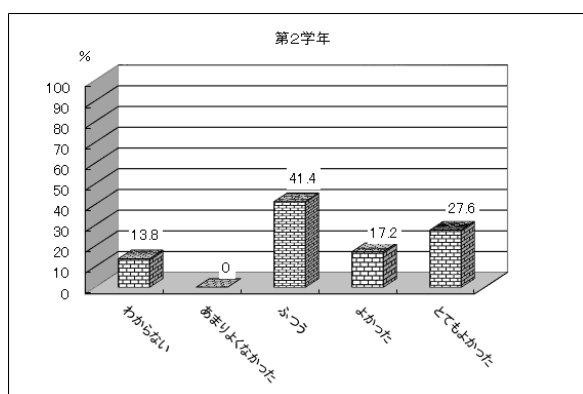
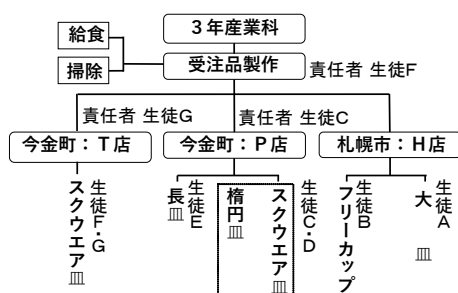
（農業科）

- 意識や考えで変わったところは学校祭に向けての製品作りなどの動きや、商品知識などの考えが変わったところだと思います。
- 今までよりも仕事や製品に対しての向き合い方が変わり、失敗をした時に周りの人への被害の大きさがわかりました。
- より仕事に対しての気持ちの入れ方が変わったと思います。どうしたら会社のためにつながる働きが出来るか考えるようになり、意識することが増えました。
- 学校祭などの売る個数や何個売れたかなどをはあくしたり、作業中の行動でいつまでにどのくらい終わらせるかなどを考えるようになりました。
- 会社になってからは、ますます作業などをしっかりとやらないと思いました。
- もっとしっかりしなきゃと思った。

（生活家庭科）

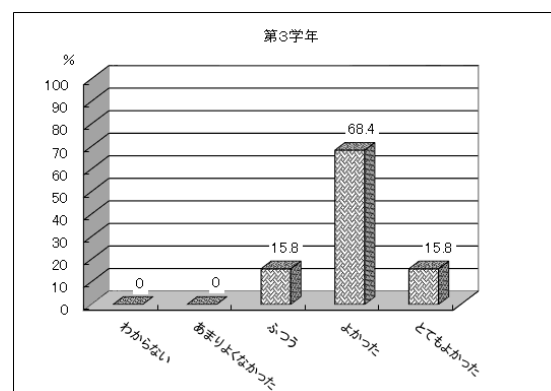
- いろいろしないで仕事をする。 ・ 分かりません。
- 1つでも多く製品を多く作るという意識が増えたと思います。
- 自分自身が仕事だと思って、各学科の製品を一生懸命作ったりなどの頑張りが見られるようになったと思います。自分が仕事をしたときと同じように、物を作って売ってということで、利益が出るなどのことが分かるようになりました。
- 私は役員をしましたが、前は作業は自分のためにあると考えていましたが、イマカネファクトリーができてからは会社のためと商品を買うお客さんを想像できるようになった。
- 製品のことも考えることがいっぱいありましたが、みんなの意見もたくさん出ていたので、良かったです。

注 組織図



(N=29)

図1 第2学年の評価



(N=19)

図2 第3学年の評価

アンケート調査では、作業学習が「会社の仕事」になってよかったかどうかについて、生徒が5段階評価を行った。その結果を学年ごとに集計すると、図1・2のとおりになる。

2年生は、「ふつう」が41.4%で最も高く、「とてもよかった」は27.6%であった。2年生の「とてもよかった」の解答数の半分以上が生活家庭科である。3年生は「よかった」が68.4%で最も高く、「とてもよかった」は15.8%であった。3年生は前提実習を経験しており、2年生との違いは現場実習経験の差が第一に挙げられる。

次いで、内容が「今養版キャリアプランニング・マトリックス」の項目に合致している上、記述量が多い学科は3年産業科である。2年生段階から、会社をイメージした作業学習に取り組んでいたため、他の学科には見られない特徴的な記述が多く見られるとともに、生徒自身が自己の成長を自覚して振り返った内容を記載している。3年農業科、生活家庭科の生徒も、記述量に差があるが、肯定的な評価が多く、模擬株式会社の取り組みがこれまでの作業学習では得られない学習経験を生徒に提供することができたことを示している。

次に、3年産業科の特徴的な記述が、知的機能による影響があったのかについて検討すると、2年産業科と3年産業科の間で知的機能が記述の内容の高さに関係する要素は見られなかった。3年産業科の指導内容・方法が他学年と異なることによって、このような成長が見られたものと考えられる。

そこで、3年産業科の指導内容・方法を生徒の記述から分析すると、次のような特徴があり、模擬株式会社の作業学習や学習全般において活用できる指導内容・方法であることが分かった。

表3「生徒の振り返り」のうち、「作業学習が『会社の仕事』になってから、作業学習の時間に『会社の仕事』をして、学べたことは何ですか？『会社の仕事』ではない時（平成27・28年度）とくらべて、学べてよかったことを書いてください。」という質問に対する回答を基に、表4に生徒が「従来の作業学習」の時と模擬株式会社の時の違いをどのように認識していたかを整理した。併せて、表4には生徒が模擬株式会社の効果であると自己評価した内容も抜粋・整理した。

なお、生徒が書いた文章は文意を損なわないように部分的に修正した。

表4 a「会社の仕事」ではない時と「会社の仕事」の時の生徒の認識の違い及び生徒の自己評価

従来の作業学習 (「会社の仕事」ではない時)	模擬株式会社 (作業学習が「会社の仕事」の時)	効果 (振り返りによる生徒の自己評価)
1年生の頃は、個人個人で作業をしたりしていた。 - 学校祭の製品作りが間に合わなく残業もたくさんする日がありました。 - 今までは自分の目線でお皿を作っていた。	<u>一学級を一つの組織として動かす。</u> そのために、<u>これからの予定を見てどのときにこれをやろうなどと決めた。</u> <u>組織図を使ってわかりやすく動いたりなど本当に卒後の職場を想定した動き方をした。</u> - 組織図を使ってみんなと関わる場面で、自分もしっかり全体のことを把握するようにした。 <u>生徒だけでなんでも進められるようにした。</u> 「教師の指示を待って行う教師主導型作業学習」 ⇨「組織図を使って作業内容の全体量と個々の生徒の担当と分量が分かり、活動の意味理解の上に立った生徒が主体的に『会社の仕事』としてペアやグループを作って組織的に取り組む作業学習」への転換	- 周りの力がなくても動けるようになり、自分のできることとできないことの区別ができるようになった。 - 残業をしないためにも作業の見通しを毎日書くようになり、1つ作る皿に何分かかるといいう時間が分かり、自分の仕事のペースをつかむことができた。 - どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で学んだことで、意味なども理解しながら動けるようになった。 - 今までは個人でやってきた作業も仲間とペアやグループを作って、会社の組織同様に動くことが増えたので、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになった。 - 全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いてわかっている状態にしたり、待つのではなく、自分から聞くことの大切さを知った。
1年生のときは、お皿を作るにあたって個人でどんどん作って、全体の調整を先生方がしていた。自分一人が作る製品だけを気にいられた。 - 丁寧に皿を作っていなかった。 - 期限内に何枚作るという納品日がなかった。校外からの受注品がなかった。 1・2・3年と作業の交流がなかった。 - 作業だけの振り返りをしていた。 - 確実な仕事をしていなかった。	- 指示をしっかりと理解しているとスムーズに動けて、仕事も早めに終わることができた。 <u>見通しを立てることをやり、期日がわかっている、そのために1つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをした。</u> <u>期限内に皿を作るようになった。</u> <u>校外からの受注品が増えた。</u> - 見通しを立てて、仕事をしていた。 <u>今日の自分の給料はいくらになるか自己評価して計算して、給料を増やすための行動、仕事をした。</u> 2グループに分けて仕事をしていた。 <u>今日1日の振り返りをした。</u> <u>全体像を把握して行動し、他の人の仕事の手伝いをした。自分の役割を果たすために、責任を持って確実に仕事をした。</u>	- 理解していることで、仕事が早く終わること、どんなときも理解していた方が、動きやすいことを学んだ。 - 仕事の進み具合がわかったり、他にやるべきことは何かわかるようになった。 - 先に仕事をして、掃除・準備は後回しにすること、トイレに行くタイミングを考えられた。 ＜従来の製品製造＞ 販売会で不特定多数を対象に製品を販売するために製造する。 ⇨顧客の求める製品が分からない。 ＜会社の仕事としての製品製造＞ 受注品を製造する。 ⇨顧客の求める規格に応じた製品を製造する。「ものづくり」学科としては、オーダーに応じた製品製造が学科の製品製造の基本である。併せて、市場調査を行って販売会で不特定多数の消費者に購入意欲を喚起できる製品を開発・工夫することが基本である。

※注目すべき箇所には下線を付加して強調した。

表4 b「会社の仕事」ではないときと「会社の仕事」のときの生徒の認識の違い及び生徒の自己評価

従来の作業学習 (「会社の仕事」ではないとき)	模擬株式会社 (作業学習が「会社の仕事」のとき)	効果 (振り返りによる生徒の自己評価)
・メモにまとめたことを寄宿舍に帰ったときに、まとめ直していなかった。 ・会社の仕事ではない時は、製品を作って学校祭で販売をして、お客様に買ってもらううれしさなどを学べた。	・<u>迷惑をかけないために、メモしたことをまとめ直した。</u> ・<u>会社の仕事になってから、自分たちが作る製品などでもっと丁寧に、期日まで終えるようにした。</u> ・与えられた時間までに片づけや掃除を終わらせることができた。 ・<u>織り機を使って1年生が製品を作るなど、技術面がアップして家庭科として学べることが増えた。</u> ・<u>お客さんのことを考えて、丁寧に作ったり形やデザインにこだわって作った。</u>	・今まで先生に頼っていたことを自分たちもできるようになった。やり方も変わり、自分の考え方もどうしたらいいか前より考えるようになった。 ・一つの会社として販売して売る難しさやどれだけ先のことを考え行動をして、どれだけ多くの仕事をするのかを学んだ。 ・同じ失敗を何度も繰り返さないことを学んだ。 ・一つ一つの仕事に知識を持てるようになった。 ・買ってくれたお客さんに喜んでもらえる嬉しさや仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、うまく作るために先生方にアドバイスをもらったりして、質のよいもの(技術)など学ぶことができた。
・会社の仕事ではない時は、良い製品を作って、売って、反省して、で終わってしまい、社会というものと触れ合う機会が実習ぐらいしかなかった。	・<u>イマカネファクトリーができてからは、会社としてやることになった。</u>	・会社としてやることになって、「社会ってこんな感じなんだー」ということが学べた。今年は販売もあったしポスターもいつもと違う色だったりデザインも違ったので、今年の方が学べたと思った。
・報告・連絡・相談もあまりやらないで、コミュニケーションもあまり取っていなかった。 他教科の授業でも作業学習の内容と関連付けて、「会社の仕事」を学ぶ場と押さえ、指導内容を構成すると、卒後の職場で活用できる知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習(仕事)に取り組む態度を育成できる。	・<u>報告・連絡・相談をどんなときでも使った。</u> ・<u>各教科の目標を書き、できるようになるための手立てや自分の障がいと向き合う時間も設定した。</u> ・<u>数学のときには作業と組み合わせた学習をした。</u> ・2・3年生のときのHRでは、社会に出たときに困らないように社会のしくみやお金を使う優先順位などをくわしく学習した。	・報告・連絡・相談も仲間や先生にする時の仕方を知ることができた。 ・報告・連絡・相談をどんな時でも使うこと、そうすると上司や周りに人が困らない、気持ち良く仕事ができること、人との信頼、人間関係が少しでもつくことを学んだ。 ・逃げずに障がいを知って自分自身を知ることができて、少しずつ自分のことを好きになっていくことを学んだ。 ・作業がやりやすくなった。

4 「会社の仕事」としての授業展開（受注品製作）

「生徒の振り返り」で特徴的な記述が見られたため、担当者3年産業科鐘ヶ江真知教諭と亀田倫代教諭による授業展開を次に示す。

(1) 指導の目標

- ・与えられた役割を果たすことができる。
- ・置かれた状況の中で組織的な考え方や行動をしながら仕事を進めることができる。
- ・自分の担当の仕事の他にも周りの状況を把握した動きをすることができる。

(2) 評価の観点

- ・指示や仕事内容を確実に理解したか（理解できるように質問したり、メモを取ったりするなど）。
- ・これまで学んだ知識や技術を生かして、製品の作成に取り組むことができたか。
- ・決められた期限内に、与えられた仕事をやり遂げることができたか。
- ・必要に応じて他の係と連絡・調整しながら仕事を進めることができたか。
- ・組織全体を把握しながら、自分の役割を考え、取り組むことができたか。

(3) 指導計画

学習内容及び学習活動	指導上の留意点
第1時「受注品の納品に向けて」	
・室蘭のカフェから受注を受けたこと、その枚数や用途を知る。 ・納品までのスケジュールを立てる。（数学）	・受注してくださったお客様の思いについて考える時間を設ける。
第2～4時「試作品の作成」	
・受注品完成に向けて必要な知識と技術の確認。 ・全員で知識と技術の共有。 ・粘土の厚さや形を統一させるための基準の設定。 ・必要な粘土の量について（数学）	・小テストを行うことで、これまで学んだ内容の定着度を確認する。 ・一定の品質の物を作る必要があることを理解できるように説明する。 ・準備段階から関わっていることを実感できるような題材を設定する。
第5～6時「組織図の活用」	
・全ての仕事量から、担当する枚数、商品チェック係、給食や掃除の連絡・調整係など各係の決定。（数学） ・想定される失敗の洗い出し。 ・各連絡系統で想定される報告・連絡・相談について（国語）	・組織図を使い、全ての仕事を把握することや、仕事の関連性を視覚的に提示する。 ・必ず全員が責任者になるよう係の数を調整する。 ・特定の仲間に負担がかかっていないかという視点を持てるよう、数学では平均の出し方や割合の考え方を指導する。 ・想定外を想定できるよう、起こるかもしれない失敗について考え、手立てを考える時間を設定した。
第7～15時「製品の作成」	
・各担当による製品の作成。	・確実な報告・連絡・相談、必要に応じた係間の調整など、適宜組織図を使いながらアドバイスをする。
第16時「納品と振り返り」	
・完成した製品の納品。 ・計画から納品までの過程の中で良かったところと改善点の見直し。 ・次の受注品に向けた計画。	・納品先の方からの感謝の言葉について伝える。 ・計画から作成までの中で振り返ったことを次の計画に生かせるよう、PDCAサイクルを基にしたワークシートを使用する。

(3) 指導計画

① 指導の実際A

学校の組織としては、模擬株式会社があり、受注品を受け、会社の仕事として作業学習に取り組むことができるようになった。それをより生徒の深い学びにするために、理解した上で作業学習に取り組むことができるよう、各教育活動とのつながりを工夫することとした。

数学では、「50枚お皿を作る場合、合計何グラムの粘土の準備が必要か。」「30枚お皿を受注した場合、どのように仕事を分担すると平等かつ確実な仕事ができるか。」「〇月〇日の締め切りにはどのような時間配分や作業量で仕事をしなければいけないか。」など、数学の時間で問題を解いた後に作業学習に取り組んだことで、数学的な考え方をを用いて理解した上で作業をすることにつながった。

国語では、「報告・連絡・相談の各場面で、誰にどのような言葉で伝えることが望ましいか。」、作文では、「文章表現や誤字脱字をグループでチェックし合い、整った状態の物を提出する。」などについて組織図を生かすとともに、確実な仕事をするという意識と習慣をつけるための授業の工夫を行った。

協同学習や模擬株式会社の取り組みを通して身に付けた力は、自分の目の前のことに集中してしまいやすい生徒たちに、周りの人と一緒に働くという感覚を実感させることである。組織図を使い、担当の振り分けや責任者を決めているときに普段は自信がなくなかなか自分から責任のある仕事を引き受けることがなかったA君が、「これって、できるの自分しかないよね、やります。」という言葉を使った。今までとは違う発言にどうしてそう思ったのかをA君に聞いてみると、「組織図を見ると、他の人はみんな2つの仕事を持っているけど、自分は一つしか担当していないから自分がやるべきだと思いました。」と発言した。

また、Bさんが全体の調整役に立候補したときには、Cさんが「Bさんはこここの責任者をやっているから、大変だと思う。私がやってみてもいいですか？」という発言があった。協同学習の一環として生徒同士で話し合いを以前から設定することが多かったが、意欲の高い生徒と意欲の低い生徒の役割の負担の差を解消することが教師側の課題の一つにあった。

しかし、組織図を使うようになってからは、やりたいやりたくないという感情だけで役割を選ぶのではなく、「自分がやるべき仕事なんだ。」という自主性が自然に徐々に育ってきたと実感する。担当が決まり、ある程度の見通しを立てた後に実際に成型の作業に入ると、生徒自ら自分たちの進捗状況を黒板に書いて常に確認できるようにしたり、自分の仕事の進捗状況を把握したりするための工夫を行っている。この学習方法を始めた当初は、教師が一人一人の立てた見通しを基にスケジュールの確認をして、全員が分かるように黒板に記入することを指示していた。

今では教師からの指示がなくても、自分たちにとって良い方法を選択できるようになってきた。優先順位をつけることが苦手な生徒にとって「みんなで協力して作業する。」という指示によって、一番優先しなければいけない作業を後回しにしても他の人の手伝いをすることが良いことだと考えて行動してしまうことがあり、なぜそれがだめなのかを理解させることが難しかった。

自分の状況や周りの状況を把握していることで、製品を製作造る途中で生まれる乾燥を待つための浮いた時間で他の担当者に「板伸ばしだけでも手伝いますか？」などという効率の良い時間の使い方ができるようになった。このように自然に協働して働く力が徐々に身に付いてきている。

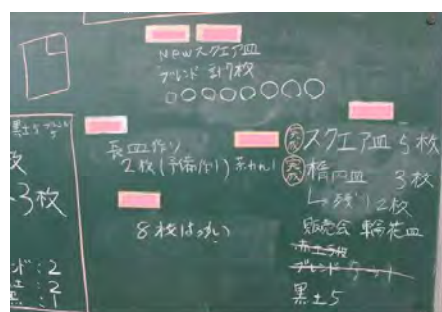


図3 生徒が書いた作業状況

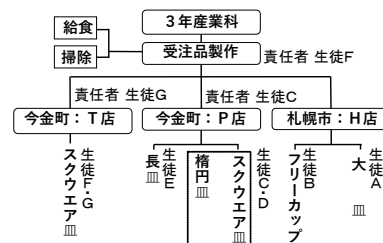


図4 組織図

② 指導の実態B

模擬株式会社のシステムを利用して授業を構成することで、生徒に一番身に付けさせたい力は周りの人と協同して働く力である。このことを念頭に置いて授業を構成している。目の前のことだけ、自分のことだけに集中しやすい生徒の実態から、仲間と共に働くことで得られる充実感や責任を持って仕事をやり遂げるための工夫ができるようになることを目的としている。

町内の飲食店を中心に合計6種類の受注品を請け負った際に、各製品に1人または2人の担当に分け責任者を決めて製作に取り組んだ。ある生徒が担当している皿の素焼き後の数枚にひびが入っていることが分かり、急きょ作り直しが必要になった。

こういった状況になることで、改めて見過ごしていた生徒の実態が見えてきた。組織図を使って仕事内容を提示していることで、組織の一員として働くことを理解しつつある生徒は、他の担当であっても見通しの修正に取り組み、自分の担当に余裕がある場合は手伝えることを探そうとする。

このような考え方の定着に役立ったと感じる学習は、数学と関連して行った平均の出し方の授業である。仕事を平等に割り振るということを基本として、誰か一人にだけ負担がかかっていないかなどという視点と実際に誰がどう動くかという視点を少しずつ身に付けられるようになってきた。

生徒からの提案があるときは相談に乗るという形で教師の意見も伝え、最終的には生徒が選択するという方法をとっている。一方で、この受注品を担当していた生徒は納期に間に合うように作り直すという考えには至らなかった。この生徒の実態として何かに継続して取り組むことが苦手であり、その結果、成功体験が乏しいということあげられる。学校の中だけで取り組む場合、やらなくても済まされるという選択肢が生まれることがある。しかし、受注品として学校外とつながっている場合には、その選択肢が生まれないことも生徒にとって仕事に責任を持つという学びにつながる。

また、日頃からコミュニケーション能力が大事であると言われていたが、作業学習においてコミュニケーションの基礎として報告・連絡・相談の3つをコミュニケーションの指導の中心にしている。予期せぬことが起きたとき誰かに報告することや、相談することがなぜ大事なのかは、組織図を使って仕事を提示することで仕事が自分だけの問題ではなく、周りの仲間の仕事にもつながっていることを説明している。

このような指導を通して、納期までに作り直すことの必要性を説明したが、その生徒は実行に移すことができなかった。このときに、もう一度生徒の実態を振り返る必要があった。以前からこの生徒はノルマが決まっている方が取り組みやすいということを言っていた。また手先は器用で製品を作ることは得意であるが、挨拶や返事という基礎的なマナーが身に付いていない部分がある。人と関わることが苦手という面からも、必要な相談をする能力が身に付いていないということもある。このことから、教師が言っていることはなんとなく分かるが、どう動いていいのかわからないということが考えられた。また、生徒の能力以上のことを求めてしまっているということにも気付いた。ここで教師に相談するように促すのではなく、全体の責任者になっている生徒に相談してみるということを提案した。正しい解決策を出すのではなく、試行錯誤しながら自分たちで答えを探してみるという経験を積ませたいと思っている。その上で、もう一度カレンダーを使い、納期まで残された日にちを確認し、スモールステップで取り組めるよう一日単位でどこまで進めるかを生徒と一緒に確認し、諦めずに仕事を最後までやり遂げる方法を考えた。

生徒の実態を見極め、理解の段階を把握し全体指導と個別指導を有効に使いながら授業を進めることが必要となる。また、実態差のある生徒に対して、見通しを授業の一時間から一日単位、その後一週間単位などの見通しを調整しながら作業に取り組むようにすることで全員が同じ目的に対して自分なりの取り組みができるようにしている。その際に、教師がつくったワークシートから始まり、カレンダー、スケジュール帳など、より将来活用しやすいものを使用するようにしている。

第5章 成果と課題

1 模擬株式会社の取り組みの成果

(1) 生徒の回答

生徒のアンケート調査結果からは、次のとおりの回答があった。なお、生徒の記述をそのまま掲載したが、表現は文意が通るように一部手直しを行った。()内は、生徒の記述内容の特徴を端的に表せるよう項目化したものである。

- ・自分一人でこの作業が成り立っているわけではない。周りの人がいるから今があるんだと思うようになった。実際に社会に出たときのことを想定して動くことが何度もあり、お客様とのやり取りが発生する場面が何度もあった。(受注生産による実社会を想定した動き、他者意識)
- ・必要なことの確認、期限、日程、報告・連絡・相談などを自分からするようになった。今では、上司や周りに迷惑をかけたくないと思うことが増えた。自分一人でも出来るようにしないと考えるようになった。(社会で働く上で必要なスキルの獲得)
- ・今後、働く上で必要なことで、前は、「うまく作れるようになりたい。」「楽しくやりたい。」だった。今は、自分の気持ちよりも相手のことを考えて、お皿を作ったり上司の人や周りに人が困らないような言葉や、行動をしないといけなく、一番の優先順位(たとえば、卒業製作よりも販売会のほうが先に終わらせるなど)などを考えられるようになった。(他者意識に立った作業の仕方やコミュニケーション)
よかったに○をつけたのには、理由があります。今まで、2年間、2年生の最初は「作業だけ」みたいな感覚で、私は思っていました(仕事を)。しかし、2年生のときから、すべて授業は仕事だと先生に言われてきて、今の考えでは、今まで学んできたことは間違いではなく、自分が少しでも変わったこと、たとえば見通し(いつまでに終わらせないといけないかなど)、優先順位(自分のことより、周りのこと優先、人がかかわっていること)、報告、連絡、相談(仕事がしやすい環境をつくるために、また、周りの人を困らせないなど)、確認もしすぎると、周りの迷惑になることや、自分の役割をはたしてから自分のためになることを考える、行動するなど、今まで2年間一日中取り組んできました。今は、作業だけではなく、全ての授業を仕事だと思っているので、よかった、に○をつけました。(キャリア教育の観点から、生徒にとって分かりやすくするために、全ての活動を仕事として押さえ、教科の授業は仕事を効果的・効率的に進めるための観点や方法を研修する場とする)
- ・1年生の時と比べて、製品を作るときにお客さんのことを思って丁寧に作るようにしたり、デザインや色なども自分で考えられるようになりました。また、時間を意識して取り組んだり、見通しとってほしいの流れを立てたりし、先のことを考えながら取り組めるようになりました。その他には、失敗が怖くて何もやらなかったり、人に頼ってばかりいましたが、挑戦することによって今までできなかったことができるようになったり、与えられた仕事は最後まで責任を持って役割を果たさなくちゃいけないと思うようになりました。失敗したら、それを取り戻すために周りのために何かできることを探して取り組んだり、修正していく力もできるようになりました。
(受注生産による他者意識とよりよい製品の製造の工夫、見通しをもった仕事の進め方、責任感、修正する力)
- ・自分たちのやっていることを会社に役に立ちたいという思いに変わったり、将来働く上でも大事になってくるので、とても勉強になりました。また、自分の役割を理解しないで物事を進めようと、それが失敗につながってしまうので、自分のこともそうだけど、周りのために何かしたり、迷惑をかけたくないという思いを持つことで仕事をすると意識や考え方がだいぶ変わりました。何回も見通しを立てることをやっていくことで、今度は見通しを立てなくてもいいことがあるので、必要なときに見通しを立てることの大事さを学びました。3年生のとき、PDCAサイクルをやり、今中生との交流学习があって振り返りシートを書いたときにPDCAをもとに振り返りをしたことで、失敗したときに次どうしなければいけないか手立てが考えやすかったです。また、このような振り返りをする中で、自分はこういうときに失敗してしまうんだと、後先のことを予測できるので振り返りはとても大事だなと思います。(組織に貢献する意識、チームワーク、見通しをもつこと、PDCAサイクルによる振り返りと改善方策の立案)

- ・失敗をしたら、他の人に迷惑がかかるので、迷惑をかけないようにしたこと。確実な仕事をするために、聞かれたことを理解すること（できていなかったら、もう一度聞く）。1・2・3年の交流が増えてより多くお客さんに満足のいく皿を作ろうと思ったこと。（確実な知識理解、質の高い製品の製造）
- ・意識や考えで変わったところは、学校祭に向けての製品作りなどの動きや、商品知識などの考えが変わったところだと思います。今までよりも仕事や製品に対しての向き合い方が変わり、失敗をしたときに周りの人への被害の大きさがわかりました。より仕事に対しての気持ちの入れ方が変わったと思います。どうしたら会社のためにつながる働きができるか考えるようになり、意識することが増えました。（商品管理、商品知識、正確な業務の推進、組織への貢献意識）
- ・学校祭などの売る個数や何個売れたかなどをはあくしたり、作業中の行動でいつまでにどのぐらい終わらせるかなどを考えるようになりました。（売り上げ計算、納期の意識）
- ・いろいろなしなくてしごとをする。（仕事のための自己統制の意識）
- ・1つでも多く製品を多く作るという意識が増えたと思います。（生産性の向上の意識）
- ・自分自身が仕事だと思って、各学科の製品を一生懸命作ったりなどの頑張りが見られるようになったと思います。（会社意識を持つことによる努力する意欲や態度の獲得）
- ・自分が仕事をしたときと同じように、物を作って売ってということで、利益が出るなどのことが分かるようになりました。（会社の仕組みの理解）
- ・私は役員をしましたが、前は作業は自分のためにあると考えていましたが、イマカネファクトリーができてからは会社のためと商品を買うお客さんを想像できるようになった。（会社設立による組織に対する意識と他者意識の獲得）
- ・製品のことも考えることがいっぱいありましたが、みんなのいけんもたくさん出ていたので、よかったです。（製品と仕入れ商品の増加に伴う、話し合いの活性化）

(2) 生徒の回答に見る意識や考え方の変化

模擬株式会社になってから、次のとおりの変容がアンケートの生徒の記述から見られた。

① 生徒の生産に対する考え方の変容

これまでの作業学習では、「自分の目線でお皿を作っていた。」「うまく作れるようになりたい。」「楽しくやりたい。」など、生徒の生産に対する考え方は、自分目線の範囲内にあり、個人目標の達成を目指して取り組んでいた。

模擬株式会社になってからは、受注生産を増やしたことにより、次のとおりの変容が見られた。

（生徒の記述内容に見られる変容）

- ・「より多くお客さんに満足のいく皿を作ろうと思った。」や「お客さんのことを考えて丁寧に作るようにしたり、デザインや色なども自分で考えられる」ように変化した。
- ・「挑戦することによって今までできなかったことができるようになったり、与えられた仕事は最後まで責任を持って役割を果たそうとする」ようになった。
- ・「1つでも多く製品を多く作るという意識が増えた」と自覚できるようになった。
- ・「自分自身が仕事だと思って、各学科の製品を一生懸命作ったりするなど」頑張れるようになった。
- ・「自分たちのやっていることを会社の役に立ちたいという思いに」変わったり、「会社のために何をするか」を考えるようになった。
- ・作業以外の授業も、毎日の作業や将来の仕事をより上手に行うことにつながっていることが分かり、自ら変わろうと意識的な努力を重ねるようになった。

生徒の記述内容からは、「受注生産による実社会を想定した動き、他者意識」、「会社意識を持つことによる努力する意欲や態度の獲得」、「受注生産によるよりよい製品の製造の工夫、見通しをもった仕事の進め方、責任感」、「生産性の向上の意識」、「組織（会社）への貢献の意識」などの向上が見られた。